

科学図書館叢書

愉婉錄

三浦梅園著



科学図書館

愉婉錄

三浦梅園

目次

凡例	三
愉婉録上	
浄国寺卓榮・上総国市兵衛・豊前国規外禪師・伊美次八	四
木付中務少輔鎮直・同三郎左衛門尉統直	一〇
安岐郷野原左平次	一六
富樫	二三
中西伊兵衛・肥後小國權三郎	二六
小野氏の寡婦	三
山本氏の寡婦	三
五田村平助	三五
久米村久米	四二
野田村了玄法師・府内瑞光寺功岳・白杵曇華道人	四四
魚町兵吉	五三
愉婉録下	

紺屋町はつ・山城国儀兵衛・糸永村矢野雖愚	五
手野村貞平邳州崔長生	六
日出藩岩野藤内	六
大分郡高城村金左衛門夫婦・本郡払田村紋作	七
豊前矢部村彌平が妻・武蔵国野口氏の妻・常陸国與次右衛門妻	七
玖珠郡今宿村介八	八
玉手禪・長州谷石翁	八
只しばし・筑前宗像正介が逸事・高野山遍阿法師	八
古狸	九
府内桃路新作	九
筑後赤星新六郎・篠才藏	九

凡例

- 一、本藩之所管、在速見国東二郡、孝子在管内、士人則直揭其姓名、庶人則曰郷、曰邨、曰町、同国而異管者、或標其郡、或標其鎮、異国者則稱其国、示内外之別也、
- 一、此書本為諭子女輩而作、故意之所往、感之所動、聞見之所及、典籍之所載、閔孝子之事、与不閔、意動而筆隨焉、所以猥雜也、雖然孝者百行之本、修孝則衆善備焉、所提耳於子女、不妨乎舐犢之情、
- 一、和漢將軍之裔、玉碎不_レ失其清、而諸史不_レ收_レ之、赤星氏之依義就_レ死、莫_レ愧_レ乎子路之結_レ纓、筑人豈可_レ殤_レ之哉、而孝子伝遺_レ之、此書首_レ舉_レ忠孝、尾言_レ令_レ終、於是乎不_レ得_レ不_レ拾_レ此焉、
- 一、此書主_レ本藩、而後及_レ本州、至_レ佗邦、非_レ有_レ抑_レ揚_レ乎其人、
- 一、此雖_レ小冊子、事_レ君父師長之跡、愛_レ子弟臣婦之事、發憤立身、取_レ舍_レ予奪之道如_レ粗具、然、要_レ覽者之回光反照、

愉婉録上

豊後 杵築 三浦晋 安鼎 著

浄国寺卓榮・上総国市兵衛・豊前国規外禪師・伊美次八

論語開卷先学の字をかかげ然して孝弟忠信とついでたり夫より孝忠にして信ならば未だ学ばずといふとも吾かならずこれを学ぶといはんと子夏の語を引り孔門親炙の人の編る所豈微意なかるべけんや管子齋国を治るに礼義廉恥の四をかかけこれを四維といへり維とは是にて民心を維ぐなり後世終に孝弟忠信礼議廉恥の八つを以て人道の要として世にすたれたるものを忘八と呼も此八を忘るるといふことなり世の中は高き賤しきより人の教まで岐多ちまたくふめる道もひとしからぬ様なれどもつらつら思へば同じく天を戴き同じく地をふみ同じく渴してのみ餓へて食ひ同じく意智情慾をたくはへて同じく此人の世に遊べは同じき者は同じうして孝弟忠信礼義廉恥かくる時は非人乞丐の徒といへどもこれをにくむ事をするむかしより道を論ずる人内外をあらそふ事ありされども天地より見るときは内よく外をなし外よく内をなすものなり今米塩水火は外にあり是を内にみちて内にある性をたもつ内にあ

る性も外にあらはれて用をなす夫天地の間生としいけるが多かる中に孝弟忠信礼義廉恥を
 しり分てる性をば只人にのみ与へたもふさるほどにつやつやものよくいひ出たりとも人の
 性とする所にそむかば鸚鵡猩猩にたぐひして心に忌憚る事なうしてほしいままならば一旦
 は天にもかつべしたとひ天にかちしばらくの栄を極むとも燈火の消なんとして光りをます
 の類にしてまた物にたとへていはんに庭なる花を麗と見て其枝を手折もてこれを挿頭かざしにす
 るがごとししばしかはらぬさまと見るも世にたのみなき色香ならずや故に天下の大道は上
 一人より下億兆の人非人乞丐にいたるまで往通ふづきものにして僧俗男女のへだてなし今
 仏子のみ通ふべく儒者のみ通べくそれぞれの人のみかよふべき道は誠の大道にはあらず孝
 弟忠信礼義廉恥はたとへば米塩水火のごとし貴きもいやしきも百家小技にいたるもかなら
 ず同敷ゆく道なり欣こん誉上人は我国東郡安岐郷浄国寺といへる浄刹あり開基より六世卓誉上
 人の弟子にして卓榮といへり父は近藤氏母は西村氏なり本府杵築と安岐との間に守江とい
 ふ所潮音庵と号する小庵ありしが所隸さがかならざりけるにこそ杵築侯の菩提所長昌寺と
 争ひ出きたりて事本府にて決しがたく終に東に詣り公の裁断を仰ぎけるに卓誉の非に定り
 て八丈島に流されぬ卓榮此たび師に随ひ東にありしが此事をふかくなげきおもひのやるか
 たなきまま翌の日泣なく公庁に出夫と辨ずる言はなく唯仰ぎ願くば我師を帰参させしめた

まへと涙とともにねがひける公の罪定れることをかく物しける事なれば大に怒られあらけ
 なく追出されぬされどもふかくおもひ込ける事なれば翌の日つとめて公庁に出かはらぬこ
 とを願ふにぞ法をとれる人いとどいかりてこれを追ふ僧志し撓まず氣屈せず雨ふり風吹暑
 さ至り寒さかはれども来る年を迎へゆく年を送り髪はのび衣はうがつに任せつつ瘦さらば
 ひ日毎に公庁に出歎き訴る事已に十六年きく人みな其義氣の切なるに感涙を催しける至誠
 やむ事なければや此事台庁に達しその志しを哀と思しめし師の僧の帰参を赦させたまひ此
 僧には下総古河に十念寺といへる淨刹の年久しくあれ居たるを賜はり此寺の中興となられ
 しが下総におひて享保六年八月九日師の卓誉卓誉同九年正月九日遷化に先だちて終られき徂徠集をよむ
 に上総国市原県姉崎村次郎兵衛が下人市兵衛が事是と類す其大略次郎兵衛村の長たり村民
 惣兵衛なる者猪を逐ふて誤て鉄砲にて里人の妻をうちたり次郎兵衛此事をかくして告ざる
 罪により五町八段の田地没収し伊豆の大島に流されけり次郎兵衛父年老妻に六歳の女子三
 才マツの男子あり此時難産してなやめり下人市兵衛三歳の子を懐にして里の乳あるかたにこひ
 人の田をかりその所得と己がむすめとをうり金八両を得て小塵借りとやかく飢寒をしのば
 せけり己も妻ありけるが子あらんことを恐れて床を同じふせざること十一年次郎兵衛罪に
 つくの日江戸にいたり官庁に出ねんごろに身を以て次郎兵衛に代らん事を願ひける姉崎江

戸をさる事二十餘里往来三日の行程なるを其時より毎月或は一度或は二度いたりて是を請ふ事十一年父なるもの已に八十三市兵衛老の相見ずして死なんことをふかくいたみ此般は空しくかへらじとちかひて出老の死なん事を歎き暫くの赦をたまひ父子の対面をゆるし給へその後わか擅訴の罪を以て身首処を殊にすとも辞せずと辞色きく人を動しける公に其忠誠を感じたまひ次郎兵衛罪赦さざるに在次郎兵衛が田宅其忠誠を感じ市兵衛に賜はると命下りけり市兵衛命を奉ぜず主人の為に是を始め己が為にこれを卒らん事義にあらざ願くば主人の孤萬五郎に給はれと願ひければ再度此事公に達し市兵衛が願のままに命下しきと事絶て欣誉と似て欣誉は本意を遂ぬ親につかふるを孝といひ君につかふるを忠とわかつてども是も一通りの差別にして君は民の父母民は君の赤子四海一家と見る時は忠孝の徳別にあらざ忠とは己をつくすなどいへば遠き様なれども畢竟俗にいふ身をはむるなり身をはむるとはたとへばのがるる所なき路にて狼子などにせまられたるがごとし傍観するものはあたらざれどものがるる道なきものは死をおしまず身をかへり見ず人の勇怯といふも顧みざるとしばしばかへり見るとの間なりされば此僧此奴進むこと有て退くをしらず死を分として生をかへり見ず是を以て台庁をも感動せしめり回天の力といふべし本朝国史を修する日特行伝にもものすべしむかし中津を鎮せられし一諸候驕奢にして酒色に沉湎し諫むるもの手打或

は斥逐義臣尸を以て諫るものあれども容受なし終に国削られ封転ぜり菩提寺大雄山法性寺の住僧規外禅師侯の不君にして方正日日に盡き姦邪志を得国祚のかたむくを見るに忍びず屢直諫誘導有しかども用ひられず師爰におゐて飲食を退け貞享三年丙寅終に寂を示さる侍者感ずる事あり進んで問、拳_二人才_一国治歟、師曰人才不_レ如_二天吏_一と偈あり

我有_二一途吉祥呪_一

時中長伸_二両脚_一眠

無問無説真般若

仏祖從來驀鼻穿

衣_二人之衣_一者抱_二人之憂_一食_二人之食_一者死_二人之事_一三衣一鉢樹下石上に身を托するは真の出家也たとひ円頂方袍たり共其廬に居り其食をくらはば去住に心をとどめざるべけんや僧徒の中この真男子ありかくのごとき輩は天下の大道を行く人なり世に大同と各高尚との別はたとへば筆づかひに唐と大和の様ありわかれて限りなき流有がごとし其流にたどりて趣きを求むれば其さまざまの味あれども終には同じ文字也道を立る人各高尚する所より教わかるる故これかれの求各ことなる事もあれど是は畢竟通天下の道としがたし右にいへる人のごとき内外貴賤の隔なく通天下の人をして節を撃しむもし是を置て別に向上の一道ありと

いはば是即その家学なり古人恥をしるは義に近しといへり禽獸を人にくらべておもひ見るに雌雄の和慕ひ子母の相むつび順境にたのしみ逆境にかなしみさして人にかはるとも見らずされども物に恥らふ心ばかり人にのみありて禽獸にはなしと覚ゆきんじうにあらざるものをもはら養んずるこそ肝心なるべけれ恥をしれば義をしる義をしれば礼を守り廉潔の操もたつ是もつて人の人たるを維ぐ所なり堯舜の道も孝弟のみなれば孝弟よりさきなるはなし忠信は是を用ゆるの徳にして礼義は是を行ふの道かりにも禽獸とならん事をはぢば此道をすてていづれをかふむべきいかばかり綾羅錦繡をかざり広厦大堂にありとても物に恥らふ心なくば人非人といはんも辞すべからず世の中の人の家貧しく衣などがち位賤しき様の恥ましきことをばいたくはぢ又はまのあたり赤面する様なることを恥て誠に恥べき事をばかたへの人いはんもつきなしとて其人に対してはふかくつつみかくししらぬ振し其人のあらぬかたにてぞとかく沙汰するもの也故に世にうしろ指といふなりあなたより指さしなんは事已に破れに臨みてこそ面辱には及ぶなれしかれば我まことに恥べきは人のかたらぬ内に自とがめかへり見るべき所にあり予嘗て幼き時故老の物がたりにきけることあり伊美の里に次八といへる乞兒あり甚愚なる者にてありしが物こふて口を餽ふにも是は餒なりとて与ゆれば饑れども食はず其母麦にて小実こぎねといふもの造るとて白に取つきて死けり是を心

に籠てぞ有けん身終る迄小実食ざりしとなり其愚さはさることなれども操の廉にしていさぎよく母に遺愛の深かりしは蓼莪の篇読心地して足を寒泉に洗ひ衣を千仞の岡にふるふがごとし世に智恵ありて敏き人は智なき人をば咲ひ侮るものなり智ありてよからぬ人は愚なる人よりもおそろしきものなれば智はたのみがたきもの也我身次八を愚なりとあざけりても其遺愛の厚き操の潔きことはいかで及ぶべき然れば我はその愚なるより愚なり我を敏しとおもひて其愚なるにはぢずんばいつかおごりほしむまなる心を制せんまたわかき輩の物がたりにはは儒なり是は仏也彼は愚なり己は智なりなど差別して大道の其間に行はるるをしらず今身を出して君につかえ其位に尸し其録をむさぼり危きを見てさけ国家の傾廢を隠黙し唯五斗米に匏繫せられてそぞろに其くつがへるを見る何の面目ありてか此規外に對せん

木付中務少輔鎮直・同三郎左衛門尉統直

古より業をはじむるの主は賢明に亡国の主は愚暗なる事世の常なりしかれども世變の間しからざるものあり吾今の杵築鎮はむかしの木付なり大友左近將監能直の子利根の四郎親秀の六男式部太夫頼泰同腹の弟大炊介親重に兄頼泰より速見郡武者所とし木付八坂歳田の三庄国東郡真玉田染の両庄等さきあたへられしよりここにいたり建長改元の年台山の城を築

子孫連綿として文禄二年癸巳亡日に至つて三百四十五年にいたる親重より十六世の孫を木付中務少輔鎮直しげなをといへり世世宗国大友に服事せり時海内鼎のごとく湧き穩なる月日もなかりしが鎮直小地僻邑にありといへども沈勇にして謀ことありよく士卒を撫育して衆の死力を得たり時宗国宗麟は勇略ありといへども暴戾にして下を憐まず其子左兵衛督義統愔にして衆を御すること能はず島津家と連年九州の探題を争ひしが日州耳川の一戦麾下の勇銳ごとごとく討死せし処鎮直の父紀伊守鎮秀ぞひとり軍を全うし麾下を護して引とれりそれより島津勢勝に乗じ太閤の援將長曾我部仙石等を討取豊中に乱れ入るほどに宗麟は丹生島につぼみ天正十四年十二月十二日義統府内にささふる事能はず高崎の城に退けば十四日には島津家久入かはる義統高崎にもたまり得ず豊前竜王の城にぞはしりける島津の大將新納武藏忠元速見国東を討随へんと多勢を卒ひて速見郡に馬を入れ日出の城にとりかけ城主大神紀伊守鎮房を亡し大神兵部太輔鎮勝がこまれる深江の城をぬき潮の湧がごとく木付の城に攻よせたり島津の勢已に筑肥の諸城をせめ轟かし勢ひ破竹のごとくなればわづか数百人籠れる小城ささふべくもみえざりけり此城陥るに及んでは国東一郡刃に血ぬらずして収むべしと城下にひたひたと着き只一もみにともみたれども鎮直少しも氣を屈せず鉄石と相ささへ寡を以て衆にあたり戦ふ事するどく守る事嚴なりかかりしかば其年も已にくれ春も半を

過ぬれどもはかばか敷軍もなく進むに道なく退くに後を恐れ唯あぐみてぞ居たりける鎮直寄手の勞れて怠るをはかり精兵をすぐり二月廿二日卒然としてきつて出で死力をつくして戦ふ程に薩兵大に敗北し府内さして引取ぬここにおひて国東の一郡枕を泰山のやすきに置太閤の軍をまちうけたり依義統も府内に帰城し鎮直の勇武を感じられ父子より牒を以て今度の働き比類なきのよし褒賞あり程なく朝鮮の役起り鎮直の子三郎左衛尉統直其子甚九郎直清と渡海せしが直清は彼地にて討死しぬ其後義統軍法にそむく事あり領国を没収せられ安芸中納言輝元にあづけられ麾下の士もみなちりぢりになりにけり統直はうき旅ながら我子かばねをうづめし地なれば名残もおしまれつ父母したふ故郷もたのむ木陰の雨そぼち心づくしの波風をうらざひしくも手とり来て水無月の末船を文字の浦につなぎ夜いたうふくるまま波間にうかむ月にむかひ舷に彷徨として国恥を無念におもひこしかたゆくすへあぢきなき世を感じ

いにしへをしたふも恋の夢の月

いざ入てまし弥陀寺の海

とかきすて腹かき切て海にしづみぬ計音木付に伝へければ父鎮直夫人を招き君辱らるれば臣死我死すべき時至れりといひければ我ひとりいかで後れ申べきと同じく死をぞとげにけ

是文祿二年六月廿五日なりされば襄祖親重は文事武備かねそなはり文永の頃は鎌倉にあ
 り宗尊親王に近侍せしが親王その文雅を愛し常に傍に侍らひしがある日からやまとの物が
 たりども有しに親重古今を援引し辨懸河のごとくなりしかば親王手をうちたまひ文場にお
 るて汝を和漢將軍とすとのたまひし程に府中の人みな和漢將軍とのみ称しける弘安年間に
 は蒙古襲来の日兄頼泰に代り三百七十餘騎を率ひ筑前博多にはせむかひ蒙古五千餘を攻な
 びけ戦艦五艘を奪ひ得てかへれり没後其霊を金鷹山にまつりて和漢將軍の祠と称し春秋の
 祭り今に廃せず遺愛の民心に存するかくのごとくなれば家の訓の世世をへて伝はりしにぞ
 世亡び嗣たつに至つて猶其芳をのこしけむ宗国傾敗の時にあたつて吉弘統運の君を諫し石
 垣原に戦死せし事成て其名掲焉たり鎮直父子忠といひ勇といひ楠氏の家風にもあやかるべ
 きをしるして伝ふる人もなく春はすみれつばなまじりの徑、秋は蔦紅葉散敷野辺に苔むす
 孤墳荒涼として残れり古をおもひ今を感じ吊祭人なく名没するをいたみここに書載侍る是
 忠の事なり此記ののすべきにあらずといふ人に答へけるを左にしるして人の子たらん者に
 孝の大意をしらしむそれ孝は始_レ於_レ事_レ親、中_レ於_レ事_レ君、終_レ立_レ於_レ身_レといへり一人有_レ慶兆
 民頼_レ之は天子の孝なり保_レ社稷_レ和_レ民人_レ諸侯の孝なり保_レ禄位_レ守_レ宗廟_レは卿大夫の孝なり
 忠順不_レ失_レ事_レ其上_レは士の孝なり謹_レ身節_レ用以養_レ父母_レは庶人の孝なり故に孝は天の経地

の緯にして百行みなここにすぶ礼記に孝の道をのべて悪言不_レ出_二於_一口_二忿言不_レ及_二於_一身_二不_レ辱_二其_一身_二不_レ羞_二其_一親_二ともいひ身者父母之遺体也行_二父母之遺体_二敢不_レ敬乎居_二処_二不_レ莊非_レ孝也泄_レ官不_レ敬非_レ孝也朋友不_レ信非_レ孝也戰陳無_レ勇非_レ孝也ともいひ孝弟_二發_二諸朝廷_二行_二乎道路_二至_二乎州巷_二放_二於_一狻狩_二修_二乎軍旅_二衆_レ以_レ義死_レ之_二而弗_二敢犯_二也ともいへり故に身を立るに終るとは父につかえ君につかえ我身天地の間に立て道に媿る事なきなれば君父とわかるれども身をたて父母を辱しめざるに至つて孝のかぬる処なり故に孝を要道とはいふなり又小孝は力をつくし大孝は匱_{とほ}しからずといふも大小は孝の優劣にはあらず小孝は小節目大孝は大規模にして匱_{とほ}からずとは孝の徳あまねければ宗廟をたもつも庶民をしたしむも我衛生によきも産業につとむるも友交の信も戰陳の勇も匱_{とほ}しからざればこそ身はたつなれ鎮直のごとき分てば忠に属すといへども匱_{とほ}しからざる孝に近かるべし世に君父よりおもきなければ忠孝はもとよりなり妻を睦び子を愛するもいづれかおろか有べきなれども事変にのぞみ其道兩つながら全ふしがたきは義といふものに斟酌して其おもきに随へば一をかくといへども全きにそむかず赤穂復讐のむかしをおもふに近松勘六行重老母を奉じあづまにてゆかりのかたにあづけ置晨昏定省ねんごろなりしが復讐明夜に相決しける時母にいとまごひすとて来りまみへ某し事重々国恩を請し身のおしからぬ命存らへ候も何とぞあだをむくひせめ

ては先君の怨を地下に慰めんとおもへばなり今はかり事已に極れば相見奉らんことも今を限りとおぼえ候身の死するは惜むにたらず候へども君の御年老よるべなきことをおもひ奉れば心うく侍るなりされども上国恩にそむき父母の名をばづかしめ生を偷んでいきん事忠にも孝にも缺候へば何とぞ老を愛護したまひ月日を送りたまへとかたりければ母吾老ぬ且ゆふべをはからぬ身なりしかるに我子節に死し名を古烈士に比せんずること是にまされる嬉しきなしとくきかましかば猶名残をしむべきにといふをさん候さも存候へどもかくと聞たまはばその思ひにやつれ給はんがかなしくて今までつつみ候とてさしうつむく母げにさも有べき事なりとて奥に入れるが時をうつして出ざればあやしとおもひ行て見れば早劔にふして空しくなりぬ老婦の故に慮をわかたば汝が志のたゆまんことを思ふほどに我先死して報国の志を一にするよしなどねんごろに書てかたはらに在行重他のあやしまんことを恐れ我罕浪のくるしさを母にかたりければ母難渋の色動きしか存らへて我を煩はすること悔てぞかくはなられけん今は悔れども益なし我親しき友に相はかり明日これを葬らんそれまで屍を守り給はれとて金若干と終焉のことどもしるし屍の傍に置あすは来らんといて其夜難におもむきける親も不慈の親にあらず子も不孝の子にあらず楠正成がいひしごとく義のおもきにひかるる也

安岐郷野原左平次

諏訪拙齋の閑居口号を按ずるに安岐郷下原村といふに善長寺といふ廢刹ありそのかみ此寺盛なりし頃此あたり野原閑竹といふ人あり此人いとけなくて父に後れこの寺に投じて薙染し隣寺浮国莫無とともにあづまのかたにおもむきけるが莫無はあつく仏の道をもとめしに此人はひたすらに丹青の道に心をそそぎ終に其妙を極め天正十五年郷にかへり帰俗し野村閑竹と号せりそののち推移り慶長の頃は此地細川忠興領となり長臣長岡佐渡杵築の城を守りしが其画を愛しかつ諸芸も堪能なりし程に采地百石をあたへ召つかはれけり閑竹の子を市左衛門といつて又絵をよくせり市左衛門子を鬼松といへり市左衛門父なくなりて後常なき事を觀じ世をはかなくやおもひけん鬼松三つのとし妻ともにふりすて身を雲水にまかせ行がたなくなれり妻は伊勢の海士の船ながしたる心地してよるべを波のかたかたにみどり子を懐にしうき年月を送しが細川候豊前より肥後に鎮を転ぜられ佐渡も杵築より八代に移りぬ鬼松がをば賀平井何某その孤なるを憐み七つ八つのころかなたに呼むかへ名を左平次と改め養ひ育ける左平次ひととなるに従ひ明くれ父の事恋しく思ひ情にたへず肥後を辞し父の跡をしたひさまよひ終に中国に入防長二州をくまなくたづね求めけれどもあらず夫より芸州へ志し広島の城下を物色しけるにある人さもありげなるがしばらく此地にも留りて絵

どもかきしが画に用ゆる調度ども其ままに引ちらし忽然として跡を晦しされり今はいづくにあるやしらずといふに力を落し又備州岡山におもむき人にとへばとあるかたに草の庵をむすびて一人の老僧すめりもし尋る人にあらずやといふに左平次うれしくかの庵にのぞけば一人の老翁座せりされど左平次襤褸のうちにして別れたる事なれば見知べき様もなし在し事共かたりもしその人にはあらずやと問ければかの翁そなたには父をたづぬる人とやいとおしの御事や父ならいかばかりか嬉しからん余所ながら墨染の袖しぼりぬ誠に世に有がたき人とこそ存候へ我その人をしれり是はさる里にて幾年ばかり前に空しくなりたまへば今は甲斐なきことなりとく帰国するにしかじけふは日もかたむきぬこなたにて夜をあかしたまへとてとどめいと念頃にもてなしてわかれぬ左平次は袖の涙の露ならば消も入たき心地せしがさてしもやむべきにあらざればなく古郷にかへりけり其後程へて風の便りにきけば此翁こそ左平次が父にてこそ有しかどおもひ切し煩惱再び妄執の雲に迷はんこと菩提の妨ぞと心づよく思ひとりすかして返せしにてぞ有けるが程なく其身も無常の嵐に誘はれて九重の泉路に趣きしよしなれば一滴の水一線の香なき魂をまつりて薄命をいためり後の杵築侯その志をかんじ招かれて後には伊藤作兵衛と名のりしとぞ中村惕齋の姫鏡を見るに発心集を引て日中頃筑紫にすみける何がしとかやいひて門田など多くもちて家豊なるも

の有りけりある時世の常なき事を思ひてふと菩提心をおこし家をすててひそかにのがれ出ま
 づ都のかたへとのぼりけるを相しれる人見付て遣しかるさまを其家にしらせければ家こそ
 りて驚きつつ我さきにと追行ける中にも年十二三なるむすめ有けるが追つきて父が袂にす
 がりこはそもいづくへとてかゆきたまふぞとどまらせ給へといいたう啼さけびけるをい
 でや汝にさまたげられじとて袂を引はなちて刀をぬき其髪をおしきりけるにぞ恐れてしば
 し立のきけるかくて父は紀伊国高野の山にのぼり終に法師となりて何がしの院に入行ひす
 ましてゐたりけり南筑紫の上人と人はよびける也むすめは猶かなしさになくなく父をした
 ひて行けるが女をいむとてかの山へは得のぼらで其麓に庵をむすびあまとなり居て明くれ
 父がことをばつとめけるとぞ此法師は白河のおりゐの帝にあひたてまつりけるときこゆ其
 頃の事なるべしとぞ西行法師は鳥羽院の御時北面左兵衛尉藤原憲清といひしが出離のおも
 ひふかく不幸の頃

世の中を夢とみるみるはかななくて

猶驚ぬ我心かな

世のはかなき事とも思ひつづくるにつけてころは秋月すみ風あはれなりければ

をしなべて物をおもはぬ人にさへ

心をつぐる秋の初風

さて秋も暮ぬ願はくば三宝この度の出家さまたげあらせ給ふなといのりとのゐりかへり
夕かた宿にさし入れば年ごろいとをしくおもふむすめの日にてよにらうたげなるさまに何
心なく垣椽に走り出で父のおはします嬉しさよなどやをそく御帰り有ける君の御ゆるしな
かりけるにやなどいひてよにいとけなきなでしこの姿にて狩衣の袂にすがりけるをたぐひ
なくいとをしくはおもへどもすぎにしかた出家を思ひとどまりしも此むすめゆへなりされ
ば第六天の魔王は一切衆生の仏になることをさへむがため妻子といふきづなをつけ置出離
をさまたぐといへり是を知りながらいかで愛着の心をなさんやこれこそ陣の前の敵、煩惱
の継をきる始也と娘を椽より下へ蹴落しければちいさき手をかほにおほひ猶父をしたひ泣
けれども聞入れず内にいりけるに彼女房もさぞかなしかりけん、なれど志しのかへらざる
を知てやさりげなくむかへけるに

露の玉消ればまたもあるものを

たのみもなきは我身也けり

これ生の得がたく死後の楽土をおもふなり

世をすつる人はまことにすつるかは

すてぬ人をぞすつるとはいふ

是彝倫の情義を煩惱と見たるなり夫人と生れ来ては人倫より重きはなしいづくに往としてか人倫の際ならざらん是人の道をして人に遠ざかるといふものなりかの教とても人を苦しめ歎かしめ功德といふ事は有まじくこそ思はるれば深草の元政上人は蓮門の巨擘なり親につかえて愛養いたらざる所なし二十四の孝僧伝を著し仏門の孝を性とすする事とけり棄_レ恩入_レ道曷_レ勞_二定省_一是又僅聞_二無為報恩之言_一而不_レ解_三其所_二以棄_レ恩報_レ恩引_二後世闡提之_一党_二背_レ真向_レ妄同入_二火坑_一といへり千光国師は始て日本に禅教をひらかれし人なれば我国の達磨なり備中の人にて叡山に在しにも父母の病をききては速に山を下り湯葉懈らず後求法の為に入宋有しが彼地にて秋を感じ

もろこしの梢もさびし日の本の

ははその紅葉ちりやしぬらん

此うた続古今集に収められたりかかる釈門の高僧皆その志かくのごとく理を以て推に親に孝の道あれば子に慈の道なき事能はずしかるを妻子を悪魔怨敵に比することは此身のどどめがたく靄のごとく電のごとく定めがたきより死後苦楽の説にまよひ不退化楽の地にいたらんことを願より君をすて親ををき妻をやもめとなし子をみなし子となし其かなしみなげ

くをかへりみず後世を願ふ事今の世にもおほかる事なり聖人の道よりしてみれば義をしらずして利心にひかるるなりそれ生死は大にしていへば造化なりきのふの日化して収むべからずけふの日現をなし将来にむかつて生生やまず往に随つて生じ去に随つて化す天地すらしのふをけふに還すこと能はずまして人をや伊川程子韓持国とものがたりの序に持国けふの日も暮ぬと嘆せんと挨拶あり持国日征けば老もともに行といひしを程子さあらば公は留り給へ持国いかでかとどまる事を得ん程子能ずんば去て可なりとは誠に徹底の理なりされど往をかなしみ死をいたむも人情の常なれば持国が嘆もやむべからざるもの也ここにおひて幽明の故をしり死生の理に達せざれば我持する所の神識を生前に推し死後にひき無中に有を生じて海市の楼台人馬を微茫に認るがごとしあらゆる態、偶なき物なし生の死に偶するは明の暗に偶するがごとし暗きをしらんとならば手にもてる燈をかせば踵をめぐらさずして暗し我明なるものをすてず暗を求めんこと得べからず哀樂悲歎禍福賞罰いける所の用を携へて死後をおもふ死出の山三途の川焔魔の庁蓮台のたのしみ刀山劔樹のくるしみ生を携へて死をみると同じ火をかかげて暗をしめすもし此思慮をひさげ去らば盡未来際いかで輪転せざる事を得ん是反観の故をしらざればなり野原筑紫はいふにたらず西行はさばかりの豪傑なりしかども此境には迷へりまして世の滔滔たるものをや世に蘇生の物語ままきこ

ゆ気絶して又よみがへるは病邪擁蔽すること有て神氣しばらく内につぼむさる程に心下かならずあたたかにして家人殯殮にまつ事あり神気内につぼむがゆへに其間夢をなすきくもの幽明の故を辨せず死したるものまた活くとす閑際筆記に有馬の僧石文気絶して十九日にして蘇す生前湖中にあそび湖山の風景をふかく愛しけるに気絶の間た湖山風景の内に遊びしとなりさすがに禪人故に天堂地獄の夢は結ばざりしと見えたり彼より説を下さば是を中有といふなるべし中有実には好消息

富樫

はや年あまた経しと覚へぬ晋冬の頃本府に遊び河村何がしの亭にて夜ふかく物がたりけるに主恕の字の義をとふ晋答へける様は恕とは諺に身をつみて人の痛さをしるといふ是なるべし唯其者の身とならずわきよりとかくいひてんは事理あたりたる様にてもかれが情にあらざること多からんとへば強き碁の下手のうつを見てなどかくあしき手はするぞとせむるがごとしもとよりさる事なれどもよはきものはいかにも心をつくしおもひはかれども是よりよき手胸中になければ無念とおもひてもせんかたなししかればよき手はよき手なれどもしらざる人にその手うてとおもふは下手の身とならず己がつよき心より人をとがむる故ならずやされば世の中の情慾愛利に溺るる心よりあらぬ浅猿しき事どもし出し人にわらひ

あざけらるるも君子ならん人ならば先其愚さを哀とも見てさとし教へ其上に其非を告んに
 ぞ自ら悔ひ責る心もきざしてんしからば己が妻子眷属にもせよ我おもふままならぬとてな
 ど人をばとがむべき只人の心の明らかならぬをとがむれども己が鏡も曇るなり彼より見ば
 おなじやうともおもふべしたとへば器をくらき所におきあるじあやまちて損ひたらんには
 下部おき様のあしきを咎んも奴婢そこなひなばなど足探りせぬ杯罵らん勢我に争はずとも
 いかでか心に服すべきさる故に恕とは彼をとがむるの心をもて己をとがめ己をゆるす心を
 もて人を恕すなり賭碁うちて楽しむ人博癡うつ人に異見加ふれども服せず是も己は事こと
 なりとおもふべけれどもかの人よりは己が田をすてて人の田を草やむぎるを病とおもふなるべ
 し只先の愚なるかたをのみいふにもあらず賢愚利鈍となく何事につけても唯とくとむかふ
 かたになり浅しと見ゆる谷水もくむ人ならでいかで底の心はしるべき前つかた人の安宅を
 謡ふをききし事ありしに満座みな辨慶が忠心を感じ涙を催しけるに晋聞いていひける様それ
 はさる事ながらつらつら富樫が心を推量すればわきて哀れに覚え侍る辨慶は己が主人とた
 のみたる義経にして生死をとにもせんと思ひ定めて出立しことなればさも有べき事なり富
 樫は義経贗山伏となり此処通らんとて其為にのみ関を設け選れて関守となりたればからめ
 とりて鎌倉に獻ぜんと思はであらんやうなし富樫も己に此任にあたるものなればむげのう

つけならん様なしまして草も木ものべふす鎌倉の勢にて嚴重の令行はれ命にかへんもはかりがたき務なればなど容易には通すべき紅は園生に種てもかくれなし十二人の山伏まぎるべきにもあらず其よろほへる様なるを義経ぞと見しはさすが眼に精力ありござんなれ赦すまじとする所を武藏坊とも覚しき男秘術を盡し辨をふるふといへども猶のがれ難ければ金剛杖とりのばしあらけなく打しを見て富樫心におもひけんこれこそ慥に義経なるをよくも思ひ切ては打けるぞ無銅の焰に座し鉄の丸かせのむよりもくるしかりけんかかる忠義の志たとひ我身鎌倉に召れ重きとがめを蒙るともよしや腹きるまでのことなり彼が志いかで無下にはなすべきぞ我だに世にうづけものとならば彼が志は立べしと思ひ定めて通しけんや矢長たけに哀なるさまいはんかたなししかるを只辨慶をのみ感じて富樫が心を汲ざらんは本意なきことならずや是を己にすると人を己に隔つるとのさかひなり君は人をつかふものなりつかふ情のみ知りて人につかはるる情をしらず子は親に抱かるる者なりいだかるるおもんばかりのみ有ていただくものの心を得ず大内義隆在京の頃簾中義隆のおもひものに

身をつみて人のいたさぞしられける

悲しかりけり恋しかるらん

と読で贈られしとぞ此人もおもひものの身に成て見ければぞ我と同じ悲しさの隔なき程に

露ねたむ心もなかりけん世の人かうやうに人の心の底をくみ其上を礼義に正さば人いかでか悦服せざるべきとかたりし事有されば孝は百行の本ともいひ至徳要道ともいへり至徳とは親に孝なれば君にも忠に家にも和する也要道とは肝心の道といふことなり肝心の道といふ事は先我身親になり子をおもふ心を推て見るべし幼より人となれるに至りても病やせまじあやまちやあらまししばし見ぬ程もあれば何かたにや行けんなど又君につかふれば不忠ならん事を恐れ人と交れば信ならざらん事を恐れ妻むかへ嫁れば其むつまじく栄行ことを天長地久と祈つつ限り有命もて果なきおもひするものなりまして酒に長じ色に耽り口甘旨にあき身遊樂にすさみ終に病を醸すをやかくのごとき輩は私しにしては人と怨をかまへ公にしては刑辟に觸れ父母よりたまはる天寿を促め庶人は身をそこなひ王侯は国を破るなり此故に己が徳を損はん程のこといづれをか親のおもんばかりの外の事ならん己に親の慮の内ならば顯然として親の志にそむくなり己に親の志にそむかば孝に乏しといはざらんや今わづかばかりの物なりとも親のかたみとて遺し給はる物あらば是をつつみ是を箱にし珍重愛護せん況我身は父母の遺体なり何れか是より貴からん父母全して是をうめり已全してこれをかへさんことを思ふべし然れば深き淵に臨めるごとく薄き氷をふめるごとく一度言を出さんにも一度足を拳んにも身を辱しめ憂をなさんことを恐るべしさる程に孝行とは親い

ませるいまさぬにはよらず我身を没てやむ者なり我身に恥を蒙るは父母のかたみを糞土にすつる也病を醸し法を犯し其身をそこなはんは父母のかたみを滅裂するなり此故に人の子の親いまして日のかえは更也男子は君につかへて忠に人に信あり其家の務に怠たらず妻子にむつまじく女は舅姑によくつかえ松の操の色かへず夫にむつまじく家のものをあはれみ芋をうみつむぎに怠らず心さま優にやさしからんにぞ孝の道全からん只親の思ひにそむかじとおもへば百行ともに修まるなれば至徳とも要道ともいふなるべし

中西伊兵衛・肥後小國權三郎

さきに本藩に一士あり中西伊兵衛といへり本姓は記せず中西の家を来り嗣り天性至孝にして老萊子の風あり養父後は老耄気味にしていろいろのそぞろごとどもいひ出てもそむかずそのうへ踊をこのみて家にかへれば其踊らん事をもとむ伊兵衛刀をくよりはやく時をうつしてうたひ踊れり猶もあかずして催せばさつてもおすきそれごとく又立あがり日くれ夜ふけて自勞るるをしらず親なくなりて後は官を辞し跡をひそめ其終る所をしらざりしと誠に有がたき人なり星霜推うつりて其言行さぐりもとむる所なしをしむべき事なり此頃肥藩村井見卜子肥中の孝子紀事を見しに小國權三郎といふものの事こそたえてこれと似たれ權三郎は小国赤馬場村の農夫なり父孫右衛門子六人もてるが中にいと季にして女子は出て嫁し

伯叔は別居し己二親と同居せしが享保丁酉といふに父病にふしあけの二月世をむなくしぬ權三郎ふかくなげき母ひとりなればいとど他事なくしばしの隔をもをしみしかば農のいとなみも怠りいよいよ貧しかりけりさるにより木をもとめ木履をひきこれをひさぎて日を送れり母は老たるがうへに心も耄耄敷物狂をして折ふしは慘澹としてたのしまず孝子は何とぞして只母の悦ばん事をのみもとむる程に母驚のごとくたて雀のごとく躍れなどいへば大の男の身として片足立小躍し又は馬のいななく真似牛の吼る真似せよ又は猫又は犬或は鼠のごとくはしれなどいふにまかせていなむいろなし老母それも常となり或日氣むすばれける折外のかたうちながめ耕したな覆ひする人のおほくむらがるを見て權三郎に早くかの人人を招き我門に市をたてよといひける權三郎親の命いなみがたく直にはしり出て田の面の人にうちむかひ我母年老心も心にあらず手足の病ありて心のうかむかたへ立出て慰むよすがもなし鬱鬱として月日を送り侍りけるに各のかく物したもふを見て何とぞ我門に集まり市をなし万の物うりかふ態し給はんことをこひ願ふかかる事いひ出んには各のいかり罵りにあはんことをおもふといへども老て旦夕をまたぬ身のいふことの切にあはれに覚へ侍る我不幸にして母の心を慰むることあたはず君の輩を煩す願はくは母の為にしばらく此たはむれをなし餘年をたのしましめ給へと念ごろにいひけるにぞ田にある人人その誠に感じ

孝子のもとめ辞すべからずとて各うちむれ其門にてしばらく市のたはむれしけり此母平生
いら虫をきらひけるがある時ふとおもひ出してそこにありかしこにありそれ駆れとて權三
郎へさがさせけるにあらざりしかば其ままにこたへけるを母実とせず常にしたしめるにも
あらざる市原村吉藏といへるおのこ呼て見せよといふ權三郎心にも得ざれども親の心に得
そむかずその村にいたり吉藏にあひ其むねをのべければ吉藏欣然として来りさがいよいよ
ら虫はあらずと告ければ母合点してやみにきかかる老の身なれば病の床も潔からざるを夜
ごとに溺器をそそぎ衣衾を洗ひ隆冬盛夏怠ることなしあたり成人人權三郎ひとり其労をと
るをあはれみ妻を迎んことを催すに權三郎頭を掉てうけがはず親其子にあらざれば寢食を
やすんぜず子たる者の心親をやすんせざるを以て憂とすもしめとる所ふ幸にして不順なら
ば我親に不順をなすなり親百歳の後は人人のことはをもおもふべし今其時にあらずとて弥
あつくつかえけるが享保己亥十月廿六日母七十四歳にして身まかりける此時權三郎二十九
歳事君に達しあつく恩賜有ける權三郎悦にたへずやがて父母の墳墓を修し塔などたてける
とぞ是によつてこれをおもふに至誠の人を感じしむること金石つらぬくべし我つねに碎玉
話にのせたる夜盜を退けし女の事を愛し誠を説くの話柄とす暗記なればたがひもやせん見
ん人本書にてらすべしむかし天正永祿世の中静ならざりし頃美濃尾張のかたはわきて四達

の地なれば盜賊ども処処に嘯聚し多く村に押入て人の物掠め奪ひなどするがある村落を夜盗とも押入せんとめぐりうかがひけるにひとつの家に夜ふかく一女子ひとり飯かしぎてありけるが其体甚閑雅人なしとて怠れる容なし飯の熟やうを見るとて飯粒を箸にはさみ蓋の上におき指にておしてこころみけるをうかがひて多くの人人なき所にてはかならず容すさみ行墮るものなりさるに此女暗室を以てみづから欺かずかかる家をば侵さぬ物ぞとてよぎて行けるとぞ是即誠の感なり至誠はやむ事なしとふるき文にもありて只積む上にしてあらはるるなり釣瓶の索の柔なるも月をつみ年をかさぬれば石の井幹もうがつわづかみなもとは手に掬ふばかりの岩清水もながれてやまざる末のかたは鼈龍蛟竜をもすましむなり酒杯の台の雫には芥を置いて沈むその同じ水なれどもつみて湖海をなす時は朦朧巨艦を重しとせず此女の力よく強盜を退け權三郎田間の農夫隣村の人を遊戯の間につかふこと手の指をつかふがごとくなるも必ず一朝一夕のしからしむるにあらざれうたよむ道はしらざれども久かたの雲井にまがふ沖津浪

むすぶ岩間の水としらざや

といひて子弟をはげまし侍る目に見へぬ鬼神も誠にはうごくなりましてや人におけるをやされども誠の道は善は善をつみて感じ悪は悪をつみて感ずる事影と響とのごとし易の文に

霜をふみて堅氷いたるの語を釈して子父を弑し臣君を弑する事一朝一夕の故にあらずといふも誠の行はるるさまなり故いかにとなれば是非の心は天性にして誰か親のしたしく君のたふときをしらざるものあらんされど人情は心にそむきもとることあれば気内にふづくみ是が外にのぶる時はもとり入れはもとり出る習ひにてたとひ上下尊卑をへだつともとはあるまじかくはあるまじなどおもふことのちり塚の塵いつしかに船車にもつむべくなりてうらみ終には骨髓に徹しよしや親にもせよ君にもあれ憤りはらさでやみなんやと邪路の一念を激して船をうかぶる水またよく船をくつがへすなりたとへば明智光秀がごとき始信長に依歸せしときはさぞ忠をもつくし力をもつくさんとこそ思ひけめそれをひたすらにうとみ辱め犬を追ふて牆にせまりし故一生の功業を一日につくされたり光秀本能寺の拳をおもひ立しとき

心しらぬ人は何ともいはばいへ

名をもいとはじ身をもいとはじ

此うたにより明智が憤り一朝一夕にあらざることしるべし是誠に臣子の大逆不道といへども君父もまた自禍を招くことあり積油の気火を起し終に焚灼の変をなすつむもの上にあらはれず発するに臨みてはいなびかりの起るごとくいかづちの撃ごとく誠に迅雷耳をおほふ

に及ばざるなり故に平安の日にあたつてその機をつつしむ事視ざる所におぢおそれきかざる所に戒しめつつしまずんば不慮の過必ずあるべし是臣子にいましむる所といへども君父もまた恐れずんばあるべからず是誠の感応を説くによつて不善のつめる所も感応のある所つつしまずんばあるべからずと君父のためにしかいへり

小野氏の寡婦

女徳は詩書に先いで猶世世の文にもあつく聞へ侍りぬ天質の美はいふにや及ぶおしへの至れるにあらずんば或る事かたかるべし婦人かんざししては人に嫁するをおもしとす已に嫁しては舅姑の心に従ふよりまされるはなし女憲に意を一人に得る是を永畢といひ意を一人に失ふ是を永訖といふといへりされば意を主夫に得ることは必らず舅姑の已を愛するにより恩義もしそむきぬれば進んでは父母の恥を増し退ひては君子のわづらひをますと班氏の文にも沙汰し侍りぬ家にありて父兄に孝弟なるはもしくは得べし骨肉のしたしみなればなるべし人にゆきて夫に順なるはずでに得がたし舅姑に孝なるは弥かたし舅に孝なる猶得べし姑に孝順なる至りて得がたし婦の性相いれがたければなるべし富るはつとめて成るべし約せわしきにいたりては性美はしく志のあつきにあらずんばいかでか孝順のつとめにたゆべけんやここにおひておとろへざる有ば天これをかへり見ざらんや財津氏名は利與年二十一

にして小野仙菴に嫁し二子をうめり長子七ツ次子二ツ仙菴病をうけて終れり財津氏二拾九姑八十七長子月俸を賜り家もとより貧し財津氏よく家を治め老姑を養ひ二子におしへ奴婢をなづくるの道各誠に出てやすらかなり故に姑心をやすくしてうれふる所なしことし姑九十七財津氏寡居十一年志をあらためず孝養いよいよ厚し邦君これをきき給ひ感悦ましましてことしの春賜して賑はし給ふされば誠のおほふべからざるにや其子猶少し人のとひ来ることなく隣家といへども其身を知る事まれなり此比かつてつかへし下部の言葉をきくに老姑耳うとくなりぬ人來り去れば婦よく其言を告伝へり夜夜起臥十度あまりにしてそひふすいとまなきにみづからつとめて其勞をいはず二子に垢つける衣をきせても奉養のそなへかかず眠をしのぶのいとまには道ある文を見て独たのしめりとなんかたりぬここにいたりて邦君の明にして恵かしこき事を信じて悦ばざるはなし世の人姑の慈ならざるをせむる事至りて婦の孝ならざるをなだむるにあつし道の明ならざるによれり財津氏の孝順なるがごとき慈ならざるの姑あらんや天下不是庭の父母なしと聞く信ならずや予おもふ二子其徳に化して能孝によく弟ならん天かならず福を下して小野氏の家栄る事を得るのみか婦の道たぐひをなして幾家の福をや給ふならん二子予に來りて学べりこれが為に其状の大概を顕して賀して是をさづけ侍るものなり

此篇は有終先生の文なり有終先生とは五田村平介が伝に見へたる綾部安正なり紺屋町はつが伝に安胤といへるは先生の子なり後に出たる魚町兵吉が伝は先生のむすめ高橋氏の寡婦千賀の筆なり

山本氏の寡婦

すすむが妻の父寺島定盛五郎石衛門老
て洞雲と称す本姓は山本氏家兄定道善石衛門
と称す侯につかえて江戸の邸にあり江戸の北八里ばかり赤山といへる里より妻むかへて住けるが宝暦八年九月の頃身まかりぬその子安兵衛がつまは摂州尼崎侯松平遠江守の邸中供頭つとめける齋田清兵衛といふ者のむすめにして名をりゑといへり世の中は末の露もとの雫のならひとて安兵衛すこしなやめる事有しが父に後るる事わづか五年同十三年臘月二日あら玉の春をだに得むかへず老たる母をのこして世を早うしぬこの時りゑがよはひ猶はたちにみたず芦葉霜老て鴛鴦の眠ひややかに菱花影くらうして孤鸞むなく鏡にまふさま余所の袖だにしぼりぬなき人をば品川天童寺に葬り子とてもいまだあらざればさるかたより養子もとめて其跡を継しかどもおさおさ敷心のなくてつるに邸を出て行がたなく成り今はたのむよすがもなきほどに老母やもめにむかひ我は赤山の生まれなればふるきちなみも多かりかなたにさりて心やすく老をも送り侍らんそなたには猶をしむべき齡ぞかしさとのかたへ帰り給へかくてぞ父母の御

心もやすからん猶行すへは人のはからふにまかせ給へなどいひ慰めけるにやもめいかなる事を仰せ候ぞ我山本の家に嫁してより身を外に託する心なしまして母人の御齡ひもかたむき給へばかよはき女の身ながらも我夫にかはりおきふしを見奉らで何かたへ帰るべきいかなる山の奥野のすゑとも御あとしたひ御行すへ見奉るべしと申ける老母其心をば感じながらいかにもしてかへさんといろいろになだめけれども得うけず老母制しかねていかにの給ふとも我はひとりこそ行べけれわかき人をば得つれじといひければやもめは涙にむせびんは力なき事に侍るさりとて我にかへらんかたなし御供かなはずともみえかくれに御あとをばしたひ奉るべし赤山にて御家の内おきふしかなはずとも今迄のよしみと覚しめしあはれ軒の下だにかし給らばよそながらうしろ影を押し候ほどは御ゆるし給はれとなげきけるにぞ老母も其人のいとおしきにこそかくはいひつれいかでかくはつれなからん田舎共住居のわびしきをも我に伴ひ給はば我子もいま世にある心地しておもひなぐさむべしとて赤山のかたにつれだちちなみの家のほとりに庵むすびすみけりやもめはなれぬ事のみを薪こり水汲あつく老母をやしなひけり我老公松平対馬守
源親盈公此貞淑をきこし召近侍岡田匡隆源左衛門
と称すを使として念頃に仰ごとありて奥にめしけりやもめ謹んで申けるはまことに有がたき仰には候へども我一度夫に後れ邸中を退きし時二たび人間に出まじとおもひそめ候きまして老た

る母も我ひとりをこそたのみ侍るよきに伝へたまへとて出ずなをかさねて命ありしかども
 我初心にそむかじとてかたく辞してうつらず此時使たりし岡田匡隆に老母かたりけるは此
 婦の貞淑至孝世に又とあるべくも覚へずあなたに見へたる杜の内天神の社あり我日ごとに
 詣づる事にて侍り雪ふれる朝などはやみても有べきにとくおきて箒とり通ひ路の雪うち
 らひ我をたすけまうで侍る此一事にても他事おもひやり給へなどむかし夫の友なればいと
 細細と物がたり有けり匡隆は聖の道にも心をよせ義にいさむ人なりしかばしばしば我とも
 がらに對し其高節を嘆じて感涙を催されき其後尼崎侯よりも聞及びたまひ奥のかたにめし
 たまひけれども我夫のつかえし君の召をも辞し侍る老の行すゑ見とげ侍るの外世に望なし
 とて出ず今はや三十年の霜雪に常盤の松の色ふかく母子恙なくて赤松にすめるよし折折風
 の便に伝へ侍る

五田村平助

我杵築前四世の邦君龍溪公あつく学をこのませたまひ正徳の頃国中の孝子貞婦等録さしめ
 毎度褒賞あり齡八十をこえ宗族むつまじきにいたりてはまのあたり御覽じ御めぐみあり郷
 の代官長吏をもしたしく召れ民の利病をとほせ給ひける公の儒臣綾部安正あるとき友人と
 城外を散歩し湯たうべんととてある家に立よりしに賤の家のならひいかにも貧しきさまな

がら垣は正しくゆひたてちり払ひ清らかに住なせり入て見るにあるじはあらず主の名を妻にとへば平介とこたふ内に入て見るに新敷畳一畳しき老母其上にあり事のよしども問ければ老母にじり出て我身をいたはりていつもかくやはらかなる畳してしかせ候とてそれより平介が孝状どもくはしく物がたりけるほどに安正感じ家にかへり心ざしある人人にかたり伝へ送り物とりしたため遣しけるより平介が事も世にしれける所は城北半道ばかり五田といふ村なり君其孝状を感じたまひ折節侍臣に平介はいかがしてあるぞ見て参れとて其安否を問給ひけると有がたき事になん侍る今その行状をとふに年月隔てつればしれる人もなし粗その人を聞に温厚至誠を以て人に接し稼穡につとめ租徭に後るる事なし温清につとめ出るに告し歸りて面合する時は四方のめづらしき事ぐさどもつみもて来り物がたりて老を慰むる事にて冬のそらにはとく薪とり閨のひまふさぎ夏の頃農のつとめ終夕餉ねもごろにとゝのへ母にむかひ今夜もあつし川辺に出給へとて手ひき脊をひ道すがら己が稼あればよしあしかたり烟草火繩茶菓子様の物あるにまかせ子等にたづさへさせむつまじく物がたりし帰ることを常にして有ける毎時としては平介が勞をいとひ家にあるときはさのみあつしともおぼへず此ままにてあらんもやすしといへば平介本意なげに己が妻子にむかひあ母人の川辺に出て涼み給はで我独ゆき涼んはさびしく物うし母人の何とて今夜は出給はぬぞ

我もあつさ忘れん物をとつぶやくにぞなれ行てすずみとらば我も行てんといふ平介心よげにうちゑみ行てあつさ忘れんとて例のごとく肩にかけ行けるとぞある時君侍臣浅井政郷なるものと安正とをつかはされ汝母につかえて孝なるをきくいとめでたしいかがつかえけるぞと問しめられければ平介恐れ入我いかで孝の道しり侍らん唯家まづしく老たる母に艱難させ候こそ心うく侍るとさしうつむきける是等の事につけても其愉色婉容おもひやられ其志を養ふの厚き事国君を感動せしならんさるほどに此君は世に有がたき君にて孝を以て下を導びき給ひしかば平介がごときものまでもその孝心にめで給ひ其起居時時間せたまひし事類ひ少き御心と感じ奉りぬされば此君は不幸短命にましくて正徳五年纔に二十五歳にして江戸の邸にして世を捨てたまひしかば御在職八年ばかりの事なれども国人思ひしたひ奉ること只父母のごとくさて此処は七島といへる草を田に夥しく作り秋の頃はふたつにさき昼は日にほし雨露をいとふ物ゆへ暮がたにはとく取納ることなり此君江府にて終らせ給ふ訃音来りける時城外さばかり広き海浜に隙なくほしける草郷民等その訃音うけたまはり唯すごすごと塩たれて己が家に帰りたり収むる者もなかりしと今につたへて美談とせり此君ある時近習の微臣御前に侍りけるにいかがしけん袂に橘入て有けるが誤りて落しけるを御覽じて汝母に饋るかとのたまひける此人老ての後までも此事をかたり出てなきけるとぞ国

初福島正則扈從の児菓子を懷より落したるを怒りて小刀尻こぶたに立られ腹きらせんとの
 のしられしとおもひくらべてみんに其隔いかばかりぞ不幸にしてかゝる威猛の下に立んに
 は只針のむしろに坐する心地こそせめ安き心はあらじ予しれる翁ありそのかたりける様は
 吾孤にして祖父にそだてられたり我祖父に其頃の人の心はいかが有しやと問ければ何とな
 く気のびやかに覺へてこころづかはしき事なく春の日の暖なる内に在がごとくなりしと答
 へしとぞ是を御行状に考へ合せ見るに君ある時羹をめしけるに膳宰誤りて調和を失せしか
 ども事急に臨みいとなみかふるとまなくこれを奉り戦恐して在しが却て御顔やはらがせ
 たまひ御かえありてすすみたまひしとぞ此御徳の下迄及びたるにぞ国人巻風和煦の思ひは
 なしけん我家君自筆し給へる苦寒の詩を蔵む其詩

凜凜風刀寒刃膚

開窓呵爪想農夫

可憐茅屋竹扉裡

酒食衣衾有又無

下たるものかく恩眷を蒙りてんには心は恩の為につかはれ命は義によりてかろき習ひなれ
 ば火をふみ水に入とても群臣いかでか是をいなむべき是等実に君の細行なりといへども是

によつて此事を思ふに前にいへる廉恥の心を養ひたまふ処大かたならず凡人をなすの道人に恥あたまぬ様にすべき事肝心なり此故に妻子はさらなり奴婢の類ひにいたるまでも大抵恥辱をあたへまじきことなり常に恥辱をあたふる時は終にはそれが常となり恥べき事も恥ずなりもて行なりさればもろこしの文を見るに聖の代には礼を以て教へたまひしが降りての世には律といふもの起りて恥の人に切なる事なくなれりさる程に位相將を極むる人にても一旦罪あれば獄屋に繋がれ又其罪もはる日は顔押拭ひふるき位にもかへるなり我国にても律を用ひたまひし事もあれど敦厚の風俗ゆへかかる浅ましきことはあらず今はその律もすたれ物ごと穩なる世なりさる程に若一旦縲紲の辱めにもあはんには志つたなき人なりともいかで人の朝廷をばけがすべき此故に賢愚は同じくありといへども朝廷の清肅あにまた漢土の類ひならんやつくづく思ふに人の悪をなす事もみな恥をしらざるより起るなりむかし後漢の末に王烈字は彦方といふ賢者ありき其あたりに牛盜めるものありしが事あらはれてけり其時かの盗人牛をうしなひし人にむかひ我いかなる刑戮にあはんもつくり出せる罪なれば甘なふてこれをうくべしあなかしこ此事王彦方に知しめたまふなといひける王烈聞き悪をはづるの志を賞し布一端を送れりそののち人あり道にて劔をおとせりよもあるまじとは思ひながら立歸て尋ねけるに日暮に及び道のほとりに一人かの劔を携へ待居てこれ

に渡しけり是をたそとよくとへばさきの牛を盗みし男にてぞ有けるかかる人だにかくなる
 習ひあればまして世の常の人よく養ひ得んにはいかで汚辱の行をばなすべき此君の御行状
 は儒臣綾部安正著して世に伝ふる事にして此野史の載べき事にもあらざれども孝道廉恥を
 以て下を率ひ給ひし事見ん人の百載の下興起せん事をこひ願ふものなりさる処に喧嘩を過
 料にてとりはからふ事ありその所のもの我かたに来るもの有しに其頃其里とかくいふ噂の
 有ければ我その事を問しに誠にさること候ひし我も其事に立あひつれど家貧しければ金す
 くなくもおもふ程に人の腹も得ふまずあはれ今少し家とみなばおもふままにふむべき者を
 と語れり我もあまりに興さめてちとおとなしき心ばへせよとてさとしやりし事あり恥しら
 ぬ人は我思ふままにこととり行ひて善悪の差別なし我四ツの莫の字を以て自いましむる事
 あり其四は莫_レ賤_レ於_レ乞、莫_レ辱_レ於_レ偷、莫_レ慘_レ於_レ奪、莫_レ虐_レ於_レ殺、是なり殺すといふは悪徳の
 頂上なりその殺すといふものはもと我有にあらざるものを奪んとして奪ひ得ざるにおこる
 なりその奪ふといふ端は偷まんとして偷むことを得ざるよりおこるなり其偷むといふ源は
 人の物を我物となさまほしきに始るなり今乞児非人の類人のいやしむは人の物を乞ふを業
 とするゆへ也我ほしきとおもはん物はなどさきの心をおしはからざるよしやさきにはをし
 む心なくとも我自乞児の業をならふ様やあるこふてやまずついにぬすむぬすみてやまず奪

ひ殺すの惨虐もここに始る古歌に

よしの川その源をたづぬれば

むぐらの雫萩の下露

といへればこれかりそめなりとてふかくかへりみつしまざらんや只その乞児草竊の徒は
 其身を人と齒ひせぬに捨つればいふにたらず其身を人なみなみの位に置世のよしあしをも
 沙汰し衣鮮に打者髪かたち清らかに出立つつぬすみ奪ひして果は人をあらぬ罪に落し勢猛
 にいひののしり恥る心の露なきはいかにかくは生れつきて人をも恥ず天をも畏れざるぞや
 よく其源を思ふべし只恥をしろとしらざるとの間也子どもの集ていさかひけるにひとりの
 子己ばくちうちとて罵りけるにおさな心にあしき物ぞと思けん大にせきて泣けるをさとし
 てばくちといふ物は只人にあざなせられてだにかく穏ならぬ物ぞまして手など觸なんには
 いかばかりか朽おしからん年とりて今の心なゆめゆめ忘れそと教し事あり今の人只その名
 目をばいみて其実をばこのむなりあやしき事なり今世行はるる富てふ物あり其好まざる人
 の論をきくに利なし損なりといふなりこれは利あらば買んずる人なり己が有にあらざらん
 物を己が有にせんと思ふきたなき心よりぞおこるらん利を得たらんこそ己が心のきたなさ
 はしる人の多くなりて恥る事も大ひなるべし此故にもし人の心に恥をだにしり侍らば人見

ず知らざる境とも心にとがむる程の事ははづかしからぬことや有べき恥しらぬ人のわるさせぬは盜する犬の人多かるるときかひまがり何をもちまぬさましていねたるがごとし人の見ぬ間覺束なし此故に我に従遊の輩には只恥をしれとさとし侍るなりさて其嗣君心源公国しりたまふても平介は親はなかりしかども其身は恙なくて重て恩賜の榮にあづかりけり

久米村久米

久米村久米は名主田邊九左衛門といふものの娘なり九左衛門嗣べき男子なかりしかばしるべのかたより嗣もとめて久米に配偶し村の長をも譲りて有けるが夫やがてこと心出来て其家をばいで近きあたりにやづくりし脇より色ある女むかへ村の司はしつ世に時めきてくらしけり久米それより節を改めずおとろの髪風に梳り自耘りつま木こり他事なく二親につかへけり親はまづしくて病るが中にも心を得て父は八十餘りにして寛延元年辰のとし久しき恙の為に身を終りぬ母はながらへて有ながら中風といふ病にそみ手足適はざる事廿三年病に苦みてや折節は物狂はしきこともあれど色養おとろへず自もはや六十路の齡こえぬれど昼は田畑のいとなみに怠らず夜は病の床につきまとひ年荒ることありても租税は早く納けり己も老の身の目もさやかならず耳も遠かりければ無頼の悪盜ども毎度はいりてわづかのたくはへども情なくとりされりさるほどに冬の空とても衣ひとつの儲にて己はわらむしろ

など敷て起臥し春はくづ、いびらいびらは豊の方言なり救荒本草の繡
束兒なり凶年にはほりむしてくふなどいふ草の根ども掘て露の
 命を繋ぎながら親には衣さむからず取つくろひ洗ひすすぎもきよらかに魚求めつ酒買つ念
 頃につかえけるが宝暦二年中の卯月終にむなしく成ける隣里かねて貧しければ嘸終焉の営
 もいぶせからんと思ひけるが思ひ外に鮮なる衣ども化者にはかつがせ野辺には幕うちはり
 僧あまたよび布施引き寺には二人が祠堂の料までいれなき跡には朝な夕なの香火おこたら
 ずしれるかたより送りものあり訪もし力合する事などあれば牌前に手を合せ在せる人に
 ふごとく其事を告げる又そのかれがれになれる夫の産土神に夏秋の田なつ物畑つ物すすめ
 てしばらくもそひし人の末長かれと祈けるさらぬ人はこれを己が心にくらべて其人咀ふな
 どいひし人もあれど只其潔き心には忘らるる身をば思はずかりそめにもつまと頼みし人な
 ればあしからじよからんとてぞ祈りけんさるをかくいふめるはいと罪ふかく覚へ侍る孝状
 国の守にも聞へ八木はちぼく二俵賜りけるに又も盗人とり去ぬあたりの人人驚きとぶらひて悔がた
 りければ久米こたへける様いやとよさにあらず我に孝状なく然るを人人とりはからひて上
 に達したり孝なくして孝子の賜をうく天の奪ふ所なり何かふかく人をとがむべきとなり我
 其時是を聞いていたく心肝に銘じき我もその人をしれりかたちいかにも氣うとくすさみ果た
 るさまなりしがかかる有がたき人なりき褐を着て玉を抱くといひつべし今は死して二十年

にもなりもやすらん

野田村了玄法師・府内瑞光寺住僧功岳・白杵曇華道人

本郡伊美の庄野田村に善光寺といへる小庵里人はつねに通り堂といひ慣はせり是に了玄といへる世捨人すめり此僧俗姓は安西氏野田の東の丘をへだてて櫛来といへる里の人なり父には早く後れ母によくつかえて有き伊美は其里より一里ばかり有りてここに八幡の宮ありまつりの頃は市立ことありまた其頃は髪そらで有けるが友どち打むれて市に遊び酒など飲で樂しひけるに酒店の主人鮮らけき鱧ふかの斬さきよらかに作りて出しけるを箸を下しわきて味よく覚へければかかる物いかに独してはくふべきとて主に器かりこれをもりつと立て一里ばかりの山路を捧げながら帰りこれを母にすすめける其孝養に速なることかくのごとしさて此人薄命にして兄弟も多く家僕もあまた有けるが皆死果て只兄の子のみぞ残ける其上身の病がちにして耕の道もなりがたく世渡るいとなみの心くるしくなりて持る田地など人に譲り先人月ごとの忌日に僧の経読んずる永きはからひより母の衣もし食ひもせん料など寺親敷方にたのみ債家の物も思ふ程に償ひわづかに残れる畑などをばありける従子に託し母の薪水の労を頼み終に世をばそむきぬ其後天の恵あり年月経るに従ひ宿疾もやや心よく此堂にすみながら母に志を盡しける母なる人の日もいつしか西山にかたむきぬ孝子日を惜し

むのならひ何かな心なぐさめまほしく遠からぬ神仏もうでなどいひ出し事に觸れすすめけるされど今は年老ぬいかでできることのあるべきなどいなみけるをそれは我にまかせ給へとて笈の様なるもの作り四ツの隅に柱をたてよき程の頃に座すべき板をまふけ脊合せにわゆがけ老を前の柱にすがりうしろによりかからせ道よき所は手をひきいこふ時は腰かけとなし宇佐のかた羅漢寺など経めぐり彦の高根宰府のかたなどすすめけれど旅やうかりけん子のいたはりやいとひけん帰るべきよし聞へければ十四五日経てかへりぬかくて出離の後十餘年母も天寿を終へけりさすがに禪門に遊ぶからに法に繫縛せらるるやうとも見へず月花の情にもうとからず年月おもしろく過せり今の世の人は髪など剃て功德せんとは多く佛像仏具堂塔のいとなみをこそすなるに此法師はすめる庵は有しまま雨もらぬ程にして塵打はらひ只ひたすらに道をつくることをこのめり先道あしき所あれば其あたり立やすらひつくづくと心に経営して扱其処の長にいたり願ふ様は我は杜多なりこころあたり乞食して往かふなるが道荒れ橋危くして老の足踏なやめり許し給はらば道つくりてんされども老の独の力の及びがたければあはれ少壯の力少し合せ給へなどいふにぞ人も心よくうけがひぬ扱そこにて己も諸人と共に汗流し鋤つがひ土運びあるひは石工招き其償ひも人にもとめずされど里人の心ありていかで此法師に石工の料まではたるべきといへばさらば心にまかせ給

とてあらそふことなしさるほどに其あたりは人これに化し岨は険をひらき谷は石を架し狭
 きはひろく危きは安く牛馬にいたるまで其賜をうけぬ我思ふ所よりしてみる時は天地の徳
 は生生に間断なくこれも万物をやしなふなりわきて人は用広く費やす事多し是もやむ事
 を得ざるの道なれば無益をなして有益を害せず用を節にし費を省き天の恵をわれ人と共に
 せん事をおもふべし是廼儉徳にして造化を賛くるのひとつなりされば孔門子羔の徳を称す
 るにも方長不折といへりしかれば故なく天地の人をすくひ物をたすくる生材を貧ぼり失な
 はんは天地の徳にそむく也又おもふに僧俗の差引は家にあると家を出るの間にして心の設
 け異なるなり家にあるものは内にして父子兄弟外にして君臣長幼より士農工賈のいとなみ
 皆そのつとめなり已に家を出る身は此境をいで此いとなみをはなれ山林に料撒してうき世
 の塵の外に心隈なく過すものなればあらそふべき位階もなくきそふべき営利もなしされど
 其法世に広がり其徒各方を以て数ふれば邪正賢愚其内に渾じ卑きは衆と群をなし高きは王
 侯と貴きを争ふ程に是を檢校する人なき事あたはず僧正僧都などいふ官出来り正はたゞ
 すを義とし都はすぶるを義とす又一国に一ヶ寺づゝ国分寺といふを置僧の非法を監せしめ
 給へれば僧都より僧正にのぼりては序を以て其事を惣裁せしならん其他和尚上人などいへ
 るは徳の標号にして門跡院家など在家の位の序なり今はなべて徳の厚薄はかくれ末徒は金

を出して位序衣帶をかひ本山は金を収めて衣食をこれになす大かたは漢の中項より粟を入れて鬱をかひし様なりさる程に其徒宗派に別あり品階に序あり教旨を異にし衣服制を同じうせず居るに自他の隔ありゆくに先後の争あり官階を帯び所属を有し己が門戸を張るより異なるをとがめ同じきを悦び得るを欲しうしなふを憂ひては家を出るもの二度家に帰りすつべき我をやしなひ長し柔和忍辱の形をかへ甲冑劍戟を帶し与をむすび類をひき動もすれば公命を拒めり国家起つて其弊を改め風やや厚きに歸し其様やや家を出る抛なれども国家天主の濫を治め給ひしより諸宗在家の葬祭に各所隸をわかち檀那と定め寺院の生産となして区域相わかれ宗旨の異見を以て其口をくちもらひ天下の為に死屍を検する一有司となるここにおゐて彼我の相弥わかれ党をたて群をわかち隊を逐ひ行に随ひ家屋什器輿馬僕従豈三衣一鉢樹下石上といふべけんやしかれば其誠の道にこころざし眞の教を手どらん人は吾輩かたへよりおもふよりも猶いぶせくおもふなるべしむかし玄賓世に高德のきこへありしかば弘仁の天子是を律師に任せんとし給ひしかども

三輪川の清き流に洗ひてし

衣の袖はけがれざりけり

とてうけず猶やみがたく思しめし大僧都さづげんとし給ひしに

外国は水くさ清し事多し

君が都はすまぬまされり

とて跡をくらましてさりぬ本邦洞門の初祖道元禪師輦轂の下をいとひ跡を越路に避られし
に後嵯峨帝その徳をしたはせ給ひ徽号を贈り紫衣をたまひ固辞ゆるし給はざりしかば

永平雖_二山浅_一

勅命重重重

卻被_二猿鶴咲_一

紫衣一老翁

と偈を献じ長くこれを高閣に奉じ終身体にかけられざりしとぞ民汗に漙つて養ひ女寒に呵
て織れる布粟即王侯士大夫もこれを生ずるに勞し給ふ物なれば徒をつらぬ帛をかさね宅を
王公に比し造化に賛なく安然としてこれをくらひ徒爾としてこれを衣んには天地生生の徳
王公士大夫匹婦匹夫の勞豈思はざるべけんやもしこれをおもはば無益を省きこれを生民有
益にもちひ其大悲願を発し天造王公の賜を同じくうけ四民の勞を謝せずんばあるべからず
されば此僧産を破りしは病の為なり麻衣草坐しばしばむなしきは僧の本色なり家に在つて
は孝なり家を出ては位階榮利に心なし孳孳として道を修理するは世の弊を矯る様なれどそ

の人にはこの心も有まじ是も化育をたすくるのひとつなれば彼君子素餐せざるの詩にもそむかじと覚ゆ聖武天皇の御時行基法師過る処白骨あればひろひうづめてこれを供養し橋を架し險をひらき耕すべき地はこれをひらき水すべき所は堤を築き飢たるに食をあたへ病るに薬を贈りしとぞきくなる今世に信心といふものは己正覚をとらんとにもあらず世の人の苦すくはんとにもあらず己来らん後の世に独たのしみなんずる慾より金銀財宝を抛ち現当無事子孫繁栄なを不退快樂の浄土を賒らんとすさる程に一旦無常を觀ずる時は数世恩眷の主君をもすて倚門舐犢の父母をも忘れ杖とも見柱とも己をおもふ妻子をも煩惱なりとてかへり見ざるごときその教はさもあらばあれ人間の教にはそむくなり他をすて己よからんとはいやしき心なり仏の教よりすとも猶三毒の惡竜にくるしめらるるや覺束なし元和の頃竹中采女正重興府内を鎮じられたり重興の父伊豆守重隆は国東郡高田の城主たり重興の足輕に安部徳右衛門といふものあり肉をくらはず妻をいれず長齋僧のごとし重興あやしび其事を問れしにこたへける様は臣もと国東郡高田の生れなり幼きより薙染して身を禪門に託したりしかるに家貧しくて父母身を託する所なし子たる者傍視するに忍ひず耕すべきの地なし故に身を出して先君につかえ父母を養ふ時兵革のやまざるにあひ朝鮮の役九州所所の取合ひしばしば艱苦をなめ侍れども一旦帰俗は父母の為なり我あへて初心にそむかずと申け

れば重興大に感じ我汝を役するに忍びずとて命じて蔣山万寿寺丹山に就て剃度せしめ瑞光寺に住せしむ法諱を功岳と称す功岳の志のごときこそ誠に愛たくおもはれ侍るこれも儒者の方よりは妻子を蓄へざるにはいろいろの説もあるべしされども此人かたちをしばらく父母の為に俗流にかへすといへども心は在家にかへさずかりの形によつて論ずる事にあらず了玄法師菴は雨もらぬほどにちりうちらはらひ居るに堂塔修造の功罪を論ぜんに情願の人あり帰依する処有て事を興さんはさも有べし今たくみをめぐらし縁をつのり官の司処の長などにはいろいろの銜ひをなしいなめるかたにもせめはたり無上の功德己もしつ人にもさせつとおもふはいかがならん昔宇治殿平等院建立し給ひ阿弥陀堂供養ありけるに山僧何某の阿闍梨導師たりしが説法の間君御堂建立の故に地獄に落させ給はんこそ浅ましく侍れとのべければ聴聞の人みな興をさましけり供養了りて宇治殿罪懺悔し給はんよしをとひ給ひければさる事に候御堂造立の間人をなやまし給へるを御得分にてあがのり給はばめでたからんといひしにぞ宇治殿感じ給ひ罪を消滅したまひしとぞもし此僧の説処是ならば今日結構の罪を見て消滅の功德なきはいぶかし夫父母に孝順に往来に義井をまうけ渡りに橋をかけ嶮しき路をひらく様のことは家を出るの教にも福田の数にかぞへたりさるにより万行ただ布施の功德を大なりとし鳩の秤ばかりのためしもあり己にとるものは応量の器あり、しかればも

ろもろの飲食財貨をうけんにも、蜂の養ひを花にとりて其色香を損はざるごとく、身を行
 ふにも、牛かふ童の杖をとり、よき水草に養ひて、人の苗稼に妨げず、衆生に苦をぬき楽
 みを与ふるぞ仏の心なるべしさるを俗のたまたますくふべきことあるを仏物とてあたへず
 我にとるに蜂牛のいましめなきは己のみか仏の心を誣るに似たり慈悲勝念千声仏作悪徒焼
 万炷香、といへり我むかし山陽道を経過せしに周防国佐波川といふ所あり里人のかたりし
 はむかし俊乗坊重源大仏再造の為にもろこしにわたり縁を募り金あまた持帰りしが此所歳
 みのらず民いたう飢けるを見て金ことごとく捨て其処を救ひしとぞ道人の心さもあるべし
 了玄法師のすめる里は我もゆかりのかたありて通ひなれ其塵なく清くいさぎよき心にめで
 はなさく朝紅葉ちるゆふべなどとひもて最^{いと}二なくうちかたらふにぞ心なぐさみ侍る誠に此
 法師成功に大小こそあらめ福田に種子を下し化育に賛あり檀波羅密の行にそむかざればこ
 れも菩薩の徒ならんと我は尊くおもひ侍る此僧うへし夕顔ののきにかかるを見て狂歌しけ
 るは

己が葉を着たりしいたりなるふくべ

風ふかばふけあばらやの軒

歌のさまはともあれ心のもとづく所煙火の気をみずされば世に世をすつるの名はありて位

序栄利の心なきは其人にかたし我かつて金剛經をよみしに読さり読來り只一箇の私の字を消釈するにあり今の世風とことなるに似たり白杵曇華道人のごとき誠の世捨人なるべし孝子の事にあらずといへども其高風を仰げとて書て此篇を結びぬ道人は本国白杵侯の菩提寺月桂寺の徒なり美濃の国某のさとに久しくすみけり其庵のほとりの処女身おもくなりひとりの子をうめり其父驚きいぶかりて事のよし娘にとひければ我なれし人のいひがたくてや有けん庵の僧にかたらひなれて設けたりといふ父怒りにたへず右の児抱き庵にいたりあくまで罵り投すて帰りぬ道人何と辨ずる事もなく抱きとりて乳をこひ飴を含ませ他事なくいとをしみて生育しかばきく人唇をかへし爪弾きせぬはなかりけりしばらくありて彼女さすがに道人にぬれ衣かつがせし事のやすからずや有けん其由かくと人に告ければ父又驚き庵にいたり罪を謝し子たびてんといひければ僧ほほゑみ此子にも又父ありやとてかへしけり此事世にかまびずしく伝へて人しきりに其徳を仰ぎければ其処をのがれ紀の路なる熊野にかくれて出づ偈あり

人生難_レ期 七十年

病身売_レ不当_二多_一錢

紅塵堆裏_レ衣去

眠熟江南自鳥前

道人の風標壁立万仞雲を凌ぎ風に御す衆情よりしてみる時は世の謗りの怨びがたき事いづれか是より甚しからんしかるをうけて自若たり無得なる心のしからしむるなるべしもし一等を降していふ時は我忍辱するときは他の悪もあらはれずみどり子も生育すべしともおもひしにや俗慮のはかる所にあらず本伝に曰一叟宗智菴主号曇華道人、自_レ幼侍_三鉄帚師于_二香林、為_レ人慕_二和菴主之風_一師_三以_三月桂招不_レ返

魚町兵吉

杵築魚町に兵吉といふ者あり後に十右衛門といふはやく父にをくれて母を養ふこと至て孝なり家貧しくしてすぎはひいとまなく勤むといへども母の衣食さへ兵吉心に足ことなく冬の寒きよなよなは母のあしを己がふところに入あたたためけるに或夜市中時を告るの勤に出るとて炬燵なんどいふもなく火鉢に火をうづみ木をゆひたて衣をかけ母をふさしめけるに何とかしけん衣に火うつりつるにもえたちぬ人人よりあつまり水はこびけしあへり其時兵吉は二三町わきのかた城近広き道のかたはらに母をいだき居けり人みな立よりとふに兵吉しかじかことたへ火をあやまちたるとがをおそれいふなる中にもたゞ母のさむからんことをいたはる誠色にあらはれ言葉にあらはる人みな感涙をもよほしける君にも聞き召れよねをくだした

まはりぬ又母目をやみけるに或人いふやうあたりちかき岩のほとりのゑびすを祭りすへたる其岩よりながれ出る水をうけいだき目をあらひ猶のみて目の病いゆるとなん兵吉ききて悦び明てのあしたとくまふでていのり水を受かへりて母の目をあらひさてのましめんとせしが折節冬の寒さはげしければ水の冷かなるをおそれたへがたくおもひ母の口には得いれず我のみけるそれより朝ごとにかくし侍るとみづからかたり誠をもていただき侍れば吾のみて母の目いゑ侍ると言ける母身まかりて後生るにつかふるがごとし朝夕膳をそなへて己食し又外へ出るにはいづかたへまかり侍るとかへりてはけふしかじかの事侍りしなど其日のありし事どもを告げる六月廿五日天神祭礼ありて市中行幸の道なれば清くちり払ひ見物の諸人家家にすだれかけならべにぎはしきに兵吉も我屋ちりはらひ清らかにして母の位牌を出しすへかたはらに居て今は何こそ通り侍れ誰は何をつとめぬなど告げるとそのあたりの者いふやう世にうつけものこそあなれ祭の日に位牌を店にかざり己も居てしかじか告げるとわらふかたはらより是を聞それ必ず孝子ならんかすと其名をとへは重右衛門といふ其餘の事心ざしの厚きしらぬ一とせ巡検使の有し時所の孝子書つけ出し侍れとの仰事ありしにも是かれ多かる中にもなをゑらびて魚町兵吉こん屋町初二人をぞ申出たまひ公の御記録にもしるされけん誠に有難き事になん其時も国の君よりも二人ともに恩賜にあづかり

ぬ今は重右衛門妻とともにありとなん

予此伝をよみて誠の擗ふべからずして人を感動せしむるをしる火をとりはなてる過は大かたならずあやまちながらも公のとがめを蒙るぞ常なるに兵吉は火をあやまてるより其徳あらはれ孝状公にも達し人の筆の跡にもとどめられ世の模範ともなりぬ世のきたなき心たくはへ天を欺むき人をたぶらかしさあらぬさまして辨にまかせいひめぐらすのともから願くは少しくみづからかへり見て善にむかふの道をひらけかしとおもふされば此男はむくつげなる様なりしかども心ばへのやさしくて老母の風引て鼻のつまるを見てみづから吸あげけるとなんちかき頃此人も鬼録にのぼりぬをしむべき事ならずや

愉婉録下

紺屋町はつ・山城国儀兵衛・糸永村矢野雖愚

紺屋町初は幼ふして父に後れ老病の母一人ありもとより家とてもなく定七といふもの不使におもひ己が木部屋有けるをかし置けりまづしければ七ツ八ツの頃よりくだ物様のものうりて母を養ひしにある日母けふのあしは多くしてあすの事心やすしと悦びければかはり少き日は母のとぼしからんことをかなしむにぞ人人あはれみ買とりてやりける十歳をも過ぬればあるは糸を引機を織り人の衣をあらひ縫ひあるは人に遣れて母の葉を求めあたへ衣食かひとゝのへなど心をつくしける其人人のもとへ行事も朝より暮までを約しゆふべは帰り省る事を常とせりさるほどに此事国の公に達し十六歳の年恩賞にあづかれり母ある時恙有ていたくなやみしに初いろいろと心をつくせども食念たへてなかりけり初かなしく折折何をがなとたづねけるに或夜塩からに少しく酒塩さしてんにはいかがあらんといひければ初うれしく夜丑三つばかり直に器ひさげて出るをかたへの人とどめけるは夜ふけ月暗し且酒肆魚店戸をたたくともおきもやらじ今暫せば夜も明なんまちて行けといひけれども得やまらず直に去て魚の店にいたれば折から入船有てうほもとむるにあひてたやすく塩辛手に入ぬ

夫より酒屋に行けるに今夜は大夫の家に宴ありて燈はりつつおき居たり思ひの外にこととのひ老母の望もかなひける母身まかりて後うれふる色面に顕れそれとはなしに喪に居れる人のごとし二度邦君の褒資ありしにみづから用ることなく母の願ふ品などに用ひたるの餘にて母の石碑を立てるが母の母なるもの石碑なしとて又己が衣をぎのりて其事を終へぬある人公の賜にて母の塔たてしはさるべき事なりみづからの衣をぎのりて外祖母の塔たてんはしづかにはかりてもよからん物をといひければ初こたへていなわれ今母の塔たてて心甚悦べり此心を推しておもへば母の母の塔たてざりしはさぞ遺憾なりしならんかくしてぞ母の心の地下にやすからんといへり是親につかえて志をつくすといふものなるべし定七も此者の志厚きにめで己が子和吉といへるにめあはせまほしく思ひ粗その聞へも有けりさるに此和吉行ひ宜しからずあまつさへ博奕様の物好みひそかに親の家を質に入銀六拾目かりとり是をも程なく遣ひすて夫より家中に僕となり主人の供して江戸に行しが明和元年江戸の屋敷をも出亡しぬ定七せんかたなく脇より養子もとめけれども是又よからぬ者にて程なく家を出で行かたなくなれり初男ともなり女ともなり身をうり人にみやづかえし親とたのみし人なりとて母にかはらずつかえしが同五年正月より定七手足かなはずなれり初不浄なるあらひすすぎもいとよからかに心の及ぶ処誠をつくさざる事なかりしかば定七感にたえ

ず折ふし病の床より手を合せて拝みける初は恐れみおもへどもせんかたなくかげのかたよ
りかへし拝みしける程なく其十月定七はてぬ、はついたくなげきあとのいとなみ其物からに
見ぐるしからず取つくろひ祠堂の料も寺に入墓詣なども怠らざりけりかかると生質故に己が
みやづかえするあるじにもふかく心を獲られ他事なくおもはれけり、しかるに安永三年七月
かの和吉江戸より帰り亡命の身なれば郭には入がたく治の南猪の尾といへる所にゆかり有
ければ夜にまぎれここにつき旅の装とく問もなく初はいかがと問けるに恙なきよしいらへ
ければ打よろこび人頼みて初を招きけるされども初がゆかりのものを心得て探りけれども
ことなる子細もなきよしなれば人してはつを遣しぬ和吉帰りける様は旅中にて従前の過悔
る心の出来り身をうらみことし十月七日父の七回忌なれば何とぞ忍びがてにも墓詣し身の
過を詫まほしく思ひなして帰れる也程なく初も来れるにぞ和吉も涙を催しさんざん我不孝に
して郷里をさりぬこなたの人なかりせば親水にうへ衣にこごえいかなるうきめにやあひ給は
んさるを無状の我にかはり心くるしき事もなく世を過されし事皆そなたよりの賜なり旅にし
て一度悔心きざしてよりいたみ心肝に発ししきりに故郷恋しくなり侍ればすごすごと帰りが
たくいろいろの艱難を忍びいささかの志しつとて装の内より紬のひとへもの一ツ縮緬の男帯
一筋取出し是は父のいませる時の心にて持来れり牌前にそなへ我罪を謝し給はれしかる後は

いかにもし給へと又木綿一端是は年回の更衣に志し侍りぬ 豊の俗年回ことに亡者の衣かゆるとて布もめんのるい牌前にそなふるなり 金

子三両とり出し是は我親の家を質に入れ置たり今いか程になりやしぬらん是にてうけ返しそなたの住所ともなせよかしと又木綿一端銀三枚取出しあつく多年の礼謝を述此上は何とぞ宜敷人をもかたらひ親の跡をもたてよ我は年回事終らば此あたりにていかにもして世をわたり侍らんといいければ初感涙をおさへ家質の事はかねて心にかけて侍ればやうやうにつぐのひ侍りぬ今一両ばかりも有らん二両は入用なし香花の料も己になしつ是有ても何かせん此後世わたるよすがともし給へといへどもそれはそなたの物にして我志にあらずとて得うけず此事終に官に達し直に帰参をゆるされ初ことしみやづかえしける家よりもいとま給り本宅をあかのり返しぬ和吉その身はちなみのかたに宿し其宅に初を置き老女やとひ、すまさせ人取結びすすめけれどもはるばるの道かへれるは親追薦の為なるぞそれを置いていかで身をやすくする營すべきとて昼は通ひて家の取つくろひし夜はちなみの方に帰り仏事つとめ其年の暮にいたり人の取はからへるにまかせ合晝の事あり夫婦むつまじく人の覚へも浅からず暮しけるおもへば世の人はあやしき事を好むものなり紫の雲起れり泉出たり鬼頭れたりなどいふ事をば感応して妙なることにいへり今此女至孝の誠此無頼の和吉を千里の外に感ぜしめ終に可人となしけるこそ類稀なることなるべし郡監綾部やすたね妥胤 華名文 ははつ 右衛門

が久しくつかえし主人なり妥胤安永丙申の冬国の事有て大坂にゆかれしに大坂学校懷徳堂の教授中井竹山先生よりかの初に贈物有て其事を嘉しられたりそれを謝するとて初手拭ひとつ妥胤の便に託してかの先生に遣しける先生孝子の贈物とて大に悦明て正月廿日其家の節会とて親族旧識門人など百数十人集り文よみ詩作り酒などたうべて遊ぶ事なりしに其日の手水場には山城なる川島村儀兵衛が家の竹にて手拭かけを作りかのでのぐひに自ら豊後杵築孝女初手製と書てかけたり妥胤も其日の賓に預れり竹山衆賓を揖しかの幌架をしめし是みな孝子の贈物なり殊にけふの賓妥胤は孝子のみやづかえし主人なりいざよりてまのあたり其孝状を聞給へと有しかば満堂の衆賓まど居してこれをきき皆嘆稱せしはまた孝女の榮にあらずや川島孝子の事は大坂加藤氏がつづりて梓にちりばめたれば世の人のしる所なりされどもその人最榮とすべき事は故ありて其文にもせざる竹山これが為に詩作つて伝ふ妥胤の許より得てここにしるしみんなの興記せんことをこひ願ふ

西岡美談近赫如、遠邇奔波訪其廬、有_レ人貌取成_二一幅_一、贊揚頌述懇_レ于_レ予、艱苦經營洞属状、京邑有_レ刻織悉書、但惜刻中脱_二旌典_一、人唯見_レ慘不_レ見_レ舒、餘慶自成山九仞、何言_二一貫從_二我初_一巔末甚所_レ可_レ道也、待我端倪娓娓攄、嗟哉鰥義天稟美、攀_レ曾援_レ閱真孝子、吾人徒読書五車、談上_レ口時心先恥、人是革島一隸農、邑是太伝藤公封、我詳_二其蹟_一非_二一日_一夫也本我嫗家備、

屢思_レ愛助_二論_三里司_一、告_レ府勸奨是事宜、邑中父老頑如_レ石、脣焦舌乾無_二一唯_一、還_レ家更念推
 挽策、俚言諄諄具_二事迹_一、普鼓_二親旧_一鳴_三不幸_一、欲_レ極涸轍眼前阨、民彝不_レ泯樹_二風声_一四方
 馳布与_レ雷争、余識不_レ識齋投贈、俄頃金錢滿_二吾籬_一、江舸齋將親轉致、母子驚喜拜且擎、余言
 此慶我何力、大誘_二群衷_一遂_二汝生_一、拳邑狂呼走紛紜、纔知淑慝淫渭分、父老相議勢如_レ此、公
 若詰問何所_レ言、向_レ我稽顙謝_二不敏_一、顛蹣造_レ府始陳聞、藤公激賞召_レ義至、褒錫復除恩意勲、
 西岡草木被_二光風_一、餘暉接_レ洛日鬱葱、誰伝_二余狀_一入_二紫禁_一、一朝獻納長信宮太后袖去御_二楓
 宸_一、天顏有_レ喜說、躬親、睿心感動篇未_レ畢、对与_二太后_一霑_二童巾_一、玉音言是上古事、豈謂明和
 年裏民、勅賜大官蔗霜果、申_レ之御府錠子銀、中使一一殷勤說、德意何須嫌_二漏泄_一、鰥義惶恐
 謝無_レ辭、聞_レ報万人齊擊節、天子明聖時隆治、不_レ隔九天与_二九地_一、市井_{臣善}亦何幸、附_二驥丹
 辰_一達_二名字_一。君不_レ見元明元正坤御日、側微旌表炤_二史筆_一、千歲上兮千歲下、寧樂平安其揆
 一、今对_二此像_一更長吁、負担窳相陋且癩、世間無_レ限輕肥子、渾把_二天倫_一作_二秦胡_一、雄才蹟績
 亦多矣、麟閣雲台皆換乎、若就_二本源_一論_二端的_一心_レ謝西岡餓隸囚、

誠に一窮民として直に天子の賜を拝する事孝の貴きにあらずんばいかでか得ん孝子多くは
 窮乏の人にあり子路も貧敷は孝道のさまたげなる事をいためり中井の勸奨により程なく義
 兵衛も心よく親を奉養せり誠に孝子貞婦忠奴の類みん人はかくこそあらまほしけれ国君だ

にそのあはれみをたれ給ふことなれば隣里郷党したしみあらん人はせめては其孝心をなりともたすけたし世の心病にあひ災にかかれば神に祈り仏にもとむされども罪を天に得ればいのるに所なしといへり只罪を天に得ざらん祈は父母に順なるに始るべしこの頃駿州の忠奴八介が行状をよむに其貞忠台庁に達し鳥目そこばく賜りけるに隣の人その賜を有がたやおもひこなたより錢米の類もち行てかなたの賜少しづつこひ是よりはかわりよろしくして遣したりし程に八介が賜いとど過分になり主人の介抱もいよいよ心よくつとめしとぞ尤良法なり一は君の賜を賞し一は孝子の資をたすけ且我善心を感じすされば礼記にも仁者の粟を求めて祀るとあれば今日追薦作福の志神まうでかへりもうしなどせんするには必孝子の物を□て用んこそ聖賢の心ならめしかればかの八介が賜をこひし事世に心ある人の誘ひしなるべしと所がらまで奥ゆかしく思ひ待る

又按ずるに善を家になして賞を国にとるとて忠貞の徒は国に君たる人は是を賞する事常典なりしかれども其用心例に従ふと中心に出るとの異あるに似たり今の肥後侯は紀州侯とならべ称して世に西海出麒麟南海生鳳凰といへる君なり肥の孝子記叟をよむに孝子の賜歳ごとにありとあり去歳の賞ことしの孝を助くるにたらざる故なるべし四国遍路せし人の物語をききしに土佐にて孝子の里に孝行柱とて標を立たるを見しといへりこれ旌

表門閭なり薩州佐宿に孝子あり所の人石碑を立て久しく伝んことをはかれり其用心異なれども其孝を欽するの意貴むべし

さて初が孝は天性にして和吉はよく過を改るものなり天性の美はよしといへども不美に生れなば力なしつとめて自ら新にすべし此時学ぶ処はつにあらずして和吉に在聖人君子といへども過はあるものなれば凡庸の人はさらなり此故に古の人過を強てとがめず過をあらたむるをよしとし過に従ひ過をかざるをふかくいましめ置れたりよつて我門生矢野雖愚がことを思ひ出るにまかせてしるし待る生れ得て謹厚四子五経の大義にも粗通し晉が觀る所の大意をも会し天文推歩にもやや通じける親につかえて甚其觀心を得たり此ごろも我妻此生の事をかたりていひける予戸を鎖して書をよむかれ戸外を過る事あれば必ず鞠躬磬折まのあたり見るにことならずしばしばすといへども其うやうや敷を変ぜずといへり冥冥の爲にその敬をゆるべざる南子遽伯玉の事どもおもひあはせて追感の涙を催しき其書をよむや書を見台浄几にのべざれば必ずこれを扇にのせ拝してよみ始めよみ了り拝して是を納む愔容を以て書にのぞむをみずかれ十五にして学に我につく本より酒量あり我これを教へて道に志す者口腹を以てその徳を損ずべからずといひければ一たび諾して再度一滴を唇に觸ず数年を経て性これと化し実みづからに自の無事、能はざるにいたる世に勇といへば目を怒いからかしただむ

きをかかけ声あらく物いふことのやうに思へどもみづからの非をしればかくすみやかにあらたむるこそまことの勇者なれ世の豪傑を以て期する人心を用ゆることなくんば是等の人にはづる事なからんや雖愚死して二十餘年謹厚いまだ此生のごときを見ず病篤きに臨みて身のしなんことをばいはず父母のなげかん事をいたみしが天寿をかさず唯一堆の土饅頭をとどめり我其頃旧廬に過りて

如今合下向二九阜一鳴上

独搏二天風一入二月明一

鶴駕不レ帰年再暮

望中無二処不レ鍾レ情

雖愚名は懋つとむ一の字は子粲追念のいたるごとに此詩を請してかなしむ

手野村貞平・邳州崔長生

戴記に礼は天より下るにもあらず地より出るにもあらず只人情より出とありまことに天質美なる人のなせる態はおのづから聖の教へにもかなふなり武藏の郷手野村貞平さる頃恩賜ありし事ども委しく尋るに其父は又介として世渡る業にくるしみ貞平十歳の時あねなるよしといふとふたりを携へ夫婦ながらうかれ出筑前志摩郡本岡村といふにとどまりぬ是寛保の

頃の事なりとかくして十七年の星霜を送りける内父又助も身まかりたのむかたもなきままた故郷にかへりけり里人あはれがり小き家むすび父がつくりすてし畑の少し有けるをそへて渡しぬされども此貞平もとより唾にして母は年老ぬ姉は手足さへかなはぬに目見えずいとなむことも心のままならねば貧しきこといふばかりなししかりといへども故なければ一飲いやしくも人にはまず一銭みだりに人にとらずたまたま人にかかる事あれば日を刻んで其期をたがへず租税を官にいろににあたつては明日喰ものなきが為に一囊を家に遺さずこれを以て年ごとに租税の壅滞なしさる程に着るべき衣にあらざれば着ずくらふべき食にあらざればくらはすなき時は短褐水飲みづから守る安永丙申母なくなりけりかたへよりも彼いかがして母葬るいとなみもすらんと思ひし処に流の上なる挾間といへる村に舅のありけるに棺に用ゆべき箱錢米味噌様のものとくとのへ預け置きかづくべき衣も鮮なるを取出し己が分にたらざることなく野辺の送りしけりひそかにきけば姉のなからん跡のいとなみもかくそなへあるよしなり母死して後は姉をやしなふこと母のごとし家貯ゆるものなければひたすらに日庸など取薪樵り力の限りつとめはたらきて月日を送れりあまりにまずしき程に姉袖乞せんと思ひ立る振を見て涙を流し己いとなみはたらく真似をして抱とどめて出さず右恩賜の八木を得て悦びの色面にあらはれ姉に奉養し且母の墓のしるしをたてぬ口物い

はざれども君の恩賜をもて母のなきしるしなせし事大かたならず榮ともおもふ事なるべし
 礼に父母の喪をのべて水漿口にいらざる事三日杖して起つとあるも凡の人の情よりして見
 れば虚文の様なるが此母終焉の事をきくに其かなしむ事限なし三日を過れども物くらふこ
 と能はず其舅なるものやうやくに拵へて始て箸をとりけるとぞ口瘡るものは耳必らずしゆ
 る習なればかしこき教へもしらん様なし処の人の来り語りしにぞ礼制の本づくところをさ
 とりて弥己が薄きを恥侍る我その家をとふらいて其一室に在ながら姉のいふ処弟きくこと
 を得ず弟のするさま姉見ること得ず面相對すといへども事胡越を隔てたるをみて覚へず
 袖をしぼりぬ此あはれさを慰むる方もやと其あらましを書つづけて是を哀れとも見ん人は
 しばらくのくるしみを救ひたまへかすと友どちに見せければ各力をそへ村長隣伍ねんごろ
 にいたはり今はむかしにくらぶれば涸轍のくるしみもやうすく聞え侍る久留島候豊后の
 太夫久留島通高号右門は君を輔け民を恵み世の賢能の名ありいかがして此記のつたへけん遙
 に助ニ力孝子とて方金二贈り来れり野人の榮何かはこれにまさるべき思ふに清貧といふも
 のは貞平が貧のごときなるべしみにだりに財宝を費してまづしからんは貧とはいふべし清と
 はいふべからずさて世には似たる事もあるものなり此頃清の張山来の虞初新志を見侍りし
 に邳州に崔長生といふものあり口瘡り手攣りもとより家貧しかりければ傭工して親を養ひ

しが其後年荒れていかにすべき様もなく終に行行市に乞けるに市人其志をしり糟糠糧糶あるにまかせて与ふれば携へて跛なる父病る母に送り己は草を堀り木を剥ぎてくらひ恙なく其春を送れり其者厚き生れにて道にて反故を見れば跪ひて是を拾ひ収め朔望に先聖孔子の廟にいたり拝してやき其灰を収めて黄河に流しけるかかる孝感にや一日拾ひける故紙に遺金あり返さんとたづぬれどもその人なし又母歿ひとつをかいけるに蕃息して父母衣服の用たりぬ親の喪にあふて水漿口にいらざる事三日働契の声きく人涙を落しけるとぞ地千里を異にし世百年を隔て流離艱苦よく貞平に似たり

日出藩岩野藤内

虞舜の親につかえたまひしに始のほどは親の心を慰めかね給ひしかど愛敬の誠をつみ終には其よろこびを致せしとかや天明甲辰の秋日出藩足軽岩野藤内が行状を聞て誠をつむの久しうして母の性嚴なるも和らぎし徳に驚く藤内淳撲至誠人に接する事厚ひとりの母に他事なくつかへけり今は八十字を越目黒白を辨せざる事久し家至つて貧しければのみくふよりあつさ寒さのそなへも心にまかせざれども夏は蚊を扇ぎ冬は衣をあたためをきふしのつかえもまめやかに只母の心にたがはんことをのみ恐れけり母常にたばこを嗜めり其働の乏しければ己夫妻は得すはで母に供しけるを母の心のやすからねば各吸てよいかで我独やは

たのしむべきといふに畏りていなむべうはあらざれども価のあらざればこと草の枯葉など
 まじへ空すひして母の心をやすんじけり一日鱈ほら売声のしけるに母求まほしき気色あるを察
 し価のなきに心を苦しめしがやむべきにあらずとて跡追はへてやうやくにかりもとめ味つ
 くりてすすめ母のひとり姻草すはざりし事共をかながへ己等もくらひて母の志を養ひける
 ある頃すこしつががありて藩の西二里ばかりぬくみといふ里の温泉に浴せしが内侍養の人
 なければ日ごとに通ひぬ道すがら口にかなふものあれば袖にし飾り又銭なき日は昼餉をそ
 のままに携へ饋りける其道に小浦といへる処あり城をさる事一里ある日爰を過るに饅頭の
 こしきより今上りて湯氣蒸蒸としていかにもむまげなるを見過しがたくかひとのへあた
 たかなる間にと足ばやにいそぎかへり母にすすめ又その身は湯あるかたにおもむきけりさ
 る程に殖漬物味噌様の物母のふた覆ひたるは命なければひらかず一年江戸にゆきほどへて
 帰りけるに藤内もてりしひとりの男子を地の領に俳優する物に売けり妻は藤内が思ふ様に
 もあらずかかる事につけ姑をうとみ己が操も正しからざりにやさそふ水に身をまかせぬ
 藤内家に入るに我をむかふべき妻子も見へずあやしと思ひながら母の恙なきを悦びさてか
 ねてともなふ人共に事のよしきき弥さあらぬ体にもてなしひそかにかねなどとのへ俳優
 の里にゆきいろいろこのわけかたりて隙もらひつれかへりぬ其後ふたたび配偶の事有け

るが是も母の心を得ずと見とりて帰しぬ親しき人共よりつどひやむべきにあらずとすすめ
て今の妻を入れるが前の人にかはり、いとねもごろにつかえけるほどに妹兄いもせの中もむつま
じくぞあかし暮しけるいくほどなく又江戸のつとめのきこえ有ければ母の齡闌に愛日の情
切なりしかば遠く離れん事をかなしみ尚強仕の頃なりしかども仕をかへし専らに母につか
えんとす此藩の法にかろきものの身退きせんすべなきをば番人として給の半をあたへ城門を
監せしむ其つかさなる人どもあはれがり、はからひて番人させいささか奉養のたすけとな
しけり此母常に塩辛き肴をこのみ猶猫を愛することふかく猫に肉なき時は母食をあまんぜ
ずさる程に力をつくしてうろくづ様の物もとめ藩にとぼしきときは朝の霜をふみ夕の雪を
はらひ小浦頭成などいふかたをさがし求めさて猫みえざれば近きあたりとほき藪草むら嵐
ふき雨そぼふるにも尋ねあるきいだき帰りて母をなぐさむかく忠誠のいたるほどに母の心
も結びし氷りとけあひて隣あたりもむつまじく中垣の一重のへだてだに今はなくいとまあ
る頃は老を背負ひ茶物がたり共して帰るを今暫と会釈せらるれば心よげに託して程なくむ
かへにゆき藤内こそ参り候へとてたすけ帰る又其家の人送り来る時は時をうつさずいたり
謝することになん侍るとぞ此時邦君木下千勝せんかつ猶いとけなくおはしましけれども此事をきき
たまひあつき恵みし給ひぬされば論語にも色かたしとありて然も有まじと思ふ事には、し

ばらく内につつみても色にあらはるるは世の通情なり身歩卒の列たりといへども腰に刀も
 帯する身の家まづしければとて子を俳優様の者にうりては便なふもおもてぶせにもおもひ
 けめども露色に見へぬ程にありしは仁義の勇にあらざしてはいかで心を制し得んわなみ常
 人のははだてて及ぶ所にあらざればこれぞ誠に堯舜の民なるべしとその徳を仰ぎ侍る孟子
 に天爵人爵の分あり人霞とは公卿太夫の類にして天爵とは仁義忠信のいひなれば人爵直に
 爵にして天爵即徳のいひなり世の人みな人爵に鞠躬磬折することをしりて徳を尊むことを
 しらずむかし先王の天下を治め給ひしや大学に高德の老人を請じ万乗の尊を屈しみづから
 弟子の礼をとり袒ひて性をさき醬を執て饋し爵を執て醕し冤して干を慙り其昇位にたち養
 老の礼終りて言をこひ給ふ周の武王の太公望に丹書を乞たまひしも三日齋して瑞冕北面し
 て其言をうけ給へり魏の信陵君の抱關鼓刀の人に其貴きを屈せしも賢を礼する故ならずや
 爵の貴きはたとへば山のごとし自高きに居て人を仰がしむ仰がざるものあれば桎梏干戈を
 以てもこれを服す徳の尊きはたとへば水のごとし己物ときそはずいよいよひききを選んで
 物只自然にこれに帰す故に爵ありといへども徳なければ其位をたもつことあたはず岍崩れ
 石落るの状なり徳あるものは爵にかからず崩れ潰ゆる物みなその流に帰す故に古より賢君
 は有徳の人を尊み有徳の人はいさぎよからざる地におらずむかし葉公といひし人竜を好み

居宅調度のかざりにいたりて童を雕鏤図画してたのしみしが童我を好むと思ひ葉公の家に降りければ葉公恐れてにげ去しと伝へたり今孝経の講あらんといはば人人経を懐にし其席におもむくべしまのあたり其至徳要道を行ふ人をかひやりて置侍らば又葉公の童なるべしかくのごとき人仰ずんばあるべからずといふを子や婿共の寿をなさんといふに従遊の人にも志しを同じうして人していささかの送り物しけるに其頃も夫婦老を扶けとなりの方に行茶たうべてありしが老もふたりがそなき事ども語り出て悦びわれは子の罰や蒙りけんかく命つれなくながらへ侍るなどかたりけるとぞ

大分郡高城村金左衛門夫婦・本郡弘田村紋作

大分郡高城村は日州延岡侯の所領なり金左衛門といふ者夫婦至孝の聞へあり延享二年丑正月侯より特恩ありて銀一貫目給はりける其村庄屋銀介組頭清右衛門安右衛門平右衛門連署して官に奉れる記を見てかくのごとき人の此地に有けるに驚けりこの年金左衛門年四十一妻は木上村といふより迎へて三十二親久左衛門七十四久左衛門後妻六十四子供男女五人あり金左衛門四の年うみの母に後れ六のとしより今の母にそだてられたり幼き時より親をうやまひひととなるにしたがひ弥孝心あつく家を出れば親の前に手をつきその行べき所帰るべき時をつげ帰れば草鞋ながら先つと内をのぞき親のつつがなき体を見て其後足あらひ手

をつき遅かりしとかりし猶見聞せしこと共物がたりちかきあたりの徘徊にも出告入面のつしみ廢することなし夜親の用を辨する度ごとに夫婦先おきて扶けかかへざることなし家のいとなみ必らず親に問ひ其指揮にそむく事なし朔望廿八日にはかならず氏神仏院にまうで村の役人隣伍には月に三度はかならずとへり家もとより貧しきに老と幼きとがうちかさなり衣食にくるしみ持来れる田地も年を追てへり人の田などかりて賃し猶たらず此四五年はちかき口戸村といふに月に廿日ばかり日をわけて身をうり上は租税に給し下は旧債をつぐのひ主人に願ひ夜ふすべき隙には歸り夜とともに種子まき草とり力をつくすといへども冬とても身には裕ひとつ布子ひとつの外たくはへなし夜の寒きには親の眠るをまち己が布子をもて父をおほへば妻も着たる衣をぬぎて母を覆へり他事是にておもひやられたり親老るに従ひ寺まうでもかなはずあはれ仏一体のあらましかばと願ひければかれこれとたづねて田尻村といへるにひとつの阿弥陀あるよしを聞出しあたふべき物なければつまもてる衣をおぎのり是をもとめ親の志しをとげさせけり一年冬寒さも例ならず父心わづらはしく鳧ひとつ給なばとのぞみける金左衛門いかにもしてすすめんと思へども家一銭のたくはへなければ力およばす只忘られず心にこめて思ひけるが誠に孝感の致す所にや師走末つかた朝とく口戸へ行とてわたる川筋に釣瓶の淵とおもて五六段もある所あり見れば手負たる鳧

ひとつ漂へり金左衛門何とぞ近づかんとすれども水ふかく岸滑なればせんかたなく唯守り居ける所に又川上より五六間ばかりなる竹ひとつ流れ来れり金左衛門うれしく衣をぬぎ水にひたり浅きかたよりつたひ其竿をとり終に鳧を得て家に帰りけるに身体ここえてしばしは物も覚へず妻柴火折くべ已にして人心つきよき程に味つくりて親にすすめける誠に王祥が鯉孟宗が筍にもはづべきにあらざ隣伍の人の言に此者幼きより老にいたる迄終に親の命にそむきしを見ずと也つらつら此人の行ひをかながうるに世の常の人ならず無言行の伝ふべき物多かりけん今我里正官に奉れる記をよみてしるせることここにとどまる世に孝子は稀なるに夫婦ともに孝なるは弥稀なり古人も孝は妻子に衰ふとて大かたは是より父母に遠く猶愚なる人は是より父母にうらみを結び恩愛を長く絶もあり露は霜とかはり霜また水となるなればよくよく思ふべきことなり本郡高田は肥前島原侯の領なり部内都甲払田村紋作天明元年此者年四十一父を小平といひて八十六歳父母恙なかりし内より志あつく家に財なければ農の暇を偷み薪を担ひ市に出米塩酒肴好むに任せ飲食みづからとのへ冬は柴の垣戸の風ふせぐに物なく苦のごときわらの屏風を立て親の枕のかたをふせぎ夏はふたりの中にふして終夜蚊を追へり母病んで牀にあること五年是を看する事始終一のごとし母已に没し父猶在り父紋作が煮炊の態までも己独つとむるを見てこれを憐み森といふ村より嫁むか

へて有けるが程なく男子一人を得たりさるに家のまづしければにや妻の親につかえ様心ならず思ひ折にふれいさめ道引けれども心になふ程のことなかりけるにや妻をよび我かく汝にともなふことひとりの老を安んぜんとなりさることなくばさるにはしかじけふ隙とらすなり、かへるべしといひければ妻はあかぬわかれをかなしみいろくどきけれども紋作きかず妻ひぎの上の子をかきなで朝夕に此子をこそ月とも花ともながめ侍るこれを置ては得かへらじさあらば此子をも我に給へといひければ親にかへん物なしとて子をそへて出しけりすべて最愛の間は格別の情あり子はまた妻よりも愛ふかしさる程にわりなきむつごとより父母にうとくなるものなりさなきも子出来れば子の行末は千代万代とおもふなれば其子にひかれあししと見てもさがりがたきものなり紋作此果断世の常の人の及ばざる所なり隣伍も此事を見きく人みな感涙を催しけるこれより布織衣ぬふ人もなければ裾をかたに結びてありけれども父にはとかくして見ぐるしからず夏多の衣服取つくるひ甘旨の奉も怠らず親族うちつどひかくてあるべきにあらざとてすすめで野辺といふ村より又妻いれけるがこれはかたのごとく老をいたはりけるほどにいとむつまじくくらしぬされどまづしさはいやまし終には己が地とてもなくなり人の田などかり心ぼそくも月日を送りけるがきかば親の此ことをなげかんことをうるさあらぬ事にもてなしいつも心よき物がたりどもして親

を慰めける是より島原は数十里の行程にして年年かり出しとて中間奉公に米とりて行事なり処のものその貧苦を見かねこれに行幸つまたるものも父の心にかなふなれば此米とりて養ひなば奉養の爲且世渡る爲にもよからんと勸けれども八十有餘の親を手弱き女に託し数十里の外にむかふ道やはある今暫くの月日をかし給へ親終焉の後は家も身もいらす唯うきことを父にきかしむるに忍びずとなげきけるにぞ其事もやみてけり里正此さまを感じ官に達しければ八木拾俵褒賞あり老を悦ばしめ郷党の美談をなしき

豊前矢部村彌平が妻・武蔵国野口氏の妻・常陸国與次右衛門妻

この頃孝婦いち女が事きけるにぞ哀を催し侍るいち女は豊前宇佐郡御許山の陽矢部村彌平といふものの妻なり彌平まづしくてひとりある母も目しひ其身も程なく人のいとふ病にしづみ目はなうがち手足ただれあやしくいぶせきかたちとなりさらばひによへるさま餘所目だに忍びがたきをいち女志いよいよかたく病看するいとま昼は彌平がおさなき弟あるを携へ終日たがへしくさぎりよるはうすづきつづれさしいをぬるひまも稀にふたりをはごくみやしなひけり彌平其勞を見るに忍びずある時枕本に招き汝我にかはり母によくつかえ我見ぐるしきをいとほず多年浅からざる志謝するに処なし宿病ゆくゆく愈なん事有べからず此上は家に帰り今のうさ忘るるかたも人のいふに任すべしかからばせめて宿債をもつぐのひ

深恩をも謝しいささか心も安かりなんとひければいちききて涙を流し我此家に来りしよ
り誓つて他適の志なし君無事の日は相そひまいらせ君やめる日は見すて参らせんなどさも
しき心ばへあらんや君かく浅ましき身となり給ふも天命なり我君につれそひ参らするも天
命なり天命いづれの処にかのがるべきとてうけひかず弥あつくつかえけるが雪に霜をかさ
ぬ其弟も又兄のごとき病を得ひとりの手弱女にやみさらばひたるをやしなふにぞもとより
糧となすべき物もなく是より宇佐の市へ行程一里ばかり岩坂とてけはしき道ありこれを薪
こり日に二度づつこへ米塩やうのものとのへ飢をしのぎける寛保辛酉の秋彌平空しくな
りければいち死骸にとりつき痛哭のこゑ隣をうごかすもとより葬りいとなむべき貯もなく
かれこれかりもとめて其事も終ぬ程なく盡七日にもなりければちなみの人ども集り追善の
事終りていちが孝貞世に類ひあらじされどもかくて月日を送らんにはいつしか人の門にも
立なんせめてさらずもあれかしとおもふなり此上は故郷にも帰れかしと念頃にすすめける
いちけうがる顔して心得ぬことをこそ承る物なれ目しひる姑病る小しうとあり朝な夕なの
烟も我なくばたれかあげん垢づける衣うるほへる床も我なくばたれかすがん夏の日のあ
つき冬の夜の寒きも我なくば誰か扶けんたとひ身乞兒となるともここをすていづくにか
ゆかんとて操たゆまずあかし暮しけるが月日とどむる関もなくあら玉の春は近づけども姑

にそなへんものなし家に唯一柄の鍬をあませりこれを典りて錢八十文を得たり此あたひにて塩をもとめ若塩とて貧しきものすなるわざに盆にのせ家ごとに初春のことぶきするにぞ里人も哀れにたへで米粟などむくひけるを種として野面川面の草あさりからふして其春もわたりぬ去程に其苦節清操世につたへて程なく中津奥平侯にきこへける侯ひそかに人をして其状をうかがはしむるに路にて破れたる衣うがてる草鞋をどろの髪うちみだし薪をいただきて市に行を見耕するおのこにとへば孝女いちと答ふよつて跡をふみ其家にいたりて見るに雨露をだにふせぎやらぬあばらやにふたりのもの床にあり市けふとのへたるものを煮かしぎすすむるさま色和し容うやうやく宛も賓主のごとし急ぎかへり其体容温柔つぶさに達しけるにぞたぐひなく感んじ給ひ米そこばくを賜はり盡なば又有司に告よとおもき恵をうけけるも今はむかし語となりぬ近き頃の文ども見るが内に事たへて似たることども多かりあはせ見よと其あらましをここにしるして照代其人にとぼしからざるを悦び婦人には夫を綱とするの教をしらしむ藤井懶齋の常盤木は武蔵刀称川のほとりに住し野口氏なるものの妻松女が節をのせたり松嫁してより程なく夫あやしき病にて形そこね手足かままり家のいとなみもならずもて行程に有し下部もちりぢりになり田がへすべき地すむべき廬もなくなり此川のほとり篋のしげれる中にあやしき庵引むすびをのれは日ごとに五六町も

へだてたるかたに人家有けるに米つき水くみなど習はぬ業に人にすがりとやかくして夫をはごくみける父は小澤の何がしとていとゆゆ敷くらしけれどむこなるものの病をいとひ何とぞ松を呼返さまほしく色色すかしいかりすすめけれども女得きかざる程に猶心もや替るとていとつれなくぞ打過けるされど松は色かへぬみさほかくつかえける夫こよなう哀に思ひて松にいとまを遣すべきよいひ出ける松うち笑ひて人はよきもあしきも皆生れ来りしより定りたる事とこそ承れかく定まりたる我身もてさらにいづこに誰をかもとめん命あらん限火水の中にありても唯人とともにへん世こそあらまほしけれ益もなき事に御心なうごかしたまひそ何事も唯我にまかせ給へといと甲斐甲斐敷なぐさめていささかたゆまず日ごとに里に行通雪をふみ雨にそぼち物求めて養ひけるに夫あまりに切に覚へある夜妻のむまく寝入たるをうかがひ忍び出川のふかき処もとめ身を投なんとしけるを松目さましあやしとしたひ来りこの様見ていだきとどめもしさあらんには我もともにこの水屑となりてんと思ひ切たる気色我身はおもひ定めながら人の命の惜まれて又ともなひ帰り十年あまりの病もをこたらず夫死して三年が程は家にもふごとくして暮しける此事江戸に聞へふるき検非使なりける石谷何某の入道きひていたう感じかのあたりの郡司とはかり、やもめを府にめし入れ家一つを申下し是をとどめて婦女の鏡ともなさばやとしきりに沙汰せられし

が猶薄命やたらざりけん其入道も病にいねたらず成行しが里人たうとみて世は安く送りけるが延宝の頃まだかたむかぬよはひ成しが世を早うしぬと見へたり又西山遺事を見侍れば水戸義公西山にいませし時封内那珂郡野上村といへるを過給ひしにあらぬさまなる女の田のおもにうなひてつかれたるさまなるを見給ひ情なき主もてる婢にや継しき母もてる子にやとみとがめ給ひ人遣して事の由聞せたまへばその村與次右衛門といふものの妻安といふ女にて夫は揚梅といふ病をやみそこね面山崩れ眼海陥り雄の元はしめもなくなり見る人面を掩ふばかりなりしが安厚く最惜みくまなくつかえけるが終には家産つき下部馬などもなくなり老たる母とおのれらふたりのみぞ残りける與次右衛門妻の浅からぬ志を感じ我は我身に得たる病なり己は家にかへり父母につかえよといひけれど涙にむせび君かくなり給ふとていかですて参らせ異木の春やはながむべき御身己に病の床にあり我なくば誰か母上の抱きかかへもせめと口説けるを夫思ひ定め猶しきりに帰るべきよしいひければ自害せんとしける程に夫あはてをしとどめかかる心としらで申侍るさあらば親子の行末たのみ侍るととどめける安悦び弥ねもごろにつかえけるのにてぞ有ける義公大に感じ給ひ其家に行給ひかのものども慰勞したまひ金一包を賜り御嗣綱條公にいひ送り給ひければかの者田畑の租税を永くゆるしたまひし程に風声相及び処の人の饋り物どもつどひ世を安く過しけるとぞ此三

節婦三幅一對といひつべしよまん人心をとどめよと書つらね侍る夫愛敬は仁義の情実父母につかふるの道にして夫につかえ子を養ふも君につかえ民にのぞむも只愛敬を拡むるなり此ともがら天性の美彫琢をからずして碎然たる明珠色養恭敬古人に恥ず体九原の土に埋むも芳は千里の外に流る嗚呼堂堂たる七尺の男子として齟あれば就き齟つくればかへりみず恩にそむき義をすて上主恩を忘れ下友朋のよしみをうしなふもの此節婦に恥ざらんや

玖珠郡今宿村介八

玖珠森の管内今宿の駅は速見より日田に通へる路にして由布山の麓なり我郷人此道を過ける頃しばしやすらはんとて垣生の小屋のあるに立よれば五十あまりの鰥あり床にあやしげなる座を設け位牌を置香花そなへたり行過て宿りけるかたにて此事ども物がたりけるに是は介八とて介九郎といふものの子也ことし安永西年五十三父母につかへて孝なり廿九にして父に後れ母によくつかへけるが送りむかふる月日もいつしか七回忌を過ぬある時母嘆じていひけるは我不孝にして生涯を貧しく過し今はつれそふ人にも後れせめては世の神仏にもまうで思ひ慰めんとすれば足たたずなりぬ餘命の盡を待のみといひけるを介八聞てさばかり思ひたまふならば子こそ候へいかでやみやみとは過すべきといらへける母咲ひて今は僅に隣るかたにだに行かふことの心にまかせざるに山をへだて江を渡り遠き旅路におもむ

かんはおもひよらずといふをそれは我思ひ設けし事あり心やすかれとて了玄法師がたくみ
 し様の笈をつくり豊前にして宇佐の神朝を拜し羅漢寺の幽洞に入り彦の高根をよぢ筑前に
 下り宰府安楽寺にまうで肥後にむかひ阿蘇の岳に上り道すがら温泉にあへば老を浴してか
 へりぬ翌の年は伊勢におほん神拜せんとて路のたくはへもなかりしかど不敵におもひ立け
 るが行かふ人宿かすかたも同じく是を憐み其志をたすけ恙あらず八十餘日を経てかへり其
 後いく程なく母もなくなりしかば其笈を靈座とさだめ香花供ふかかるよしども邦君久留島
 信濃守きき給ひあつく褒賞ありしよしこまかに語りけるかの郷人帰るさま又介八を尋ねて
 そなたには親にあつく自脊負ひはるばる伊勢路にも下られし事浅からざりし孝思かななど
 会釈しければ介八孝などいふは我おもひよらず只参宮にいざなひしはわれこそ母の蔭に入
 り路程も人の恵ふかく思ひの外の神まうでしつと答へけるにぞ其言にも孝子の志あらはれ
 ぬと事の始末かたるにそのまま筆にとめんも覺束なく便あるかたより玖珠藩の事うかがひ
 ければ彼ものの行状君に達し宝曆十二年午七月十八日褒賞ありしと日記にとどまると云云

玉手禪・長州谷石翁

すすむむかし長崎に遊びたりし時谷石翁といへるをあるじとして十餘日とどまりき是は長
 州萩府の人なり朝とくおき家洒掃し暮かたには事とくしまひて入相の頃はいと物閑なりそ

のいひける様は世の中の物は何によらずつかへばつかはるものなりさなき時は物また我
 をつかふなり物に怠る心よりあしたは日におこされ夕は夜に催されしづ心なく過すなり我
 日に先だちておき朝の事どもしまひて日にその出るを催すべし暮に先だちて昼のことを終
 へ日にそのいるを催すべし賤の女の歌にいつ来て見ても玉手たまたすき擽といひてうたふなり人いつ
 とも玉手擽かけたらんには月日といへ共つかふべしといへり我その時肺腑に銘じ四十年
 一日今にわすれはやらざれども懈れる心より忘れたるにひとし誠に舜邇言を察すといへる
 もかかる類ひなるべし土佐の土何がしが娘の嫁するを送るとて書たる饑草といふものの中
 によしやよしなやうらむまじみだれ車よわがわるひといふをあげて反求の道をおしへし事
 みへたり邇言もおもへば格言なり聖賢の言といへどもかへり見る心なき時は非をかざり人
 をせむるの具となるなり此言いやしき里巷の言なれども力をつけて服膺せば天をもうらみ
 ず人をもなめざる境なるべし人によりて少し文のはしにても見待ると物しらぬ人をば無下
 に見下し彼何をかするらんなど思ひあなどるよりあらぬ悔も生ずるなりまして人の已にせ
 ちにいはん事などかりそめにきき侍らんは徳のかるきの至りなるべし此故に狂夫の言も必
 ず察すといへり予おもひ合せたることありある夕ぐれ山寺の下過けるに乞児の衣ほころび
 折から雪氣の寒きに肩そびやかし通りしが物狂おしき者と見へて独つぶやきける様は此寺

へ立よりて物こひてんやいやいや寺には物ほどこすものなり物こはんよしなしとて打過たり人いやしくも身に省察の心なくんば身士君子となりても取捨の心は時として此乞児にも恥ざらんや

只しばし・筑前宗像正介が逸事・高野山遍阿法師

論語に孔子の色難しとの給へるは心に欲せぬ事をつとめてなす時はなせどもとかく顔くせのよからぬものなりかほくせよからぬは親も無心におもふ物からひかへて得いはぬなり礼記に孝子の深愛あるものは和氣あり和氣あるものは愉色有愉色あるものは婉容ありといふも其処にて生れつき孝なる人は其人とても親のなす事にこれはさなくともあるべき物をとおもふことなくては叶はざる事なり是も親の大なる過ちあらんには是非たがはぬ事もならざるべし是即罪を隣里郷党に得せしめんよりはむしろむまくいさめよといふ所にして易には母の蠱に幹たり貞にすべからずといへり此母といふ字は男子の中正にあらざる所をたとへていへればあながち女の親といふ事にはあらず外の事なりせば己が心にそまずともつとめてなすことの只我心より出てなしなん程にあらましかば親の心のいかに嬉しからんさて是は親につかふるが為にしていへれどもおしわたしていはばいづれの人にもかくあらんこそめでたかるべけれざる程に孝は百行の本ともいふなるべしわれ筑前の人に宗像の正介が

事を聞り此事は本伝には見へず是に類せる事他の孝子行状にもしばしは見へ侍れば人をた
 がひけるかもしらず正介何やらん普請ありて役たちして行けるにかた足にはわらぢはきか
 た足には足半あしなかといふ物はきてつとめけるを奉行見とがめてたづねけるに前の夜えだちせん
 とて支度しけるに正介が父なるものは足半はきてよといひ母なる者はわらぢよからんと
 いふに正介思ひわづらひてかくしたるにぞ有ける愉色婉容はかかる間にもあらんまことに
 かく質あつく生れつきなんは甚うらやましき事ながらむまれつきは天なればもとめて得べ
 きことにあらず只其質あつき人のなしたらんことを手本にして人一度してよくする事をお
 のれ百度して何とぞ其人に似んことをもとむべし我紀の南龍公の事とて承れる事あり定か
 にはしらずある時いづかたにか管内通り給ふこと有しに君通らせたまふとて万民皆道をさ
 しはさみ出て見奉りし中に老さらばへる女を念頃に介抱してうづくまり居けるを御覽じ其
 子の志しを賞じ給ひ恩恵ありけるに其恩恵をうらやみ思ふも有てかさねて通行し給ふ時路
 のほとりに老女をかたのごとくいたはりて君を拝することを又前のごとく賞賜ありしかる
 を其事をするものありてかれは実の孝子にあらず前日君の恩賜ありしをうらやみかくこし
 らへける不敵の者なりと申ければいなとよ学ぶとは真似することなり不孝ならんもの孝
 なるをよしと見て真似せんは志のよきなり是も孝子なり汝等つとめてよき事の真似せよと

の給ひしとぞ故に学ば生知安行の上よりは困しんでしり利して行ふにこそわきて入るべき事なれわざわざとまねすべきことなり愉色婉容正介ごとき質美なる人はつとめずしてしかあるなるべし第二等に下りては強てつとむる事なりかの小野道風書にこころをそそぎうみける折から庭の泉水に柳の枝打たれたる下より蛙のとびあがらんとしけれどもとどかさざりしが、しばしば飛つつはてには枝に飛うつりけるを見て只つとむるにあることをさとり終に入木成就しけるごとく不都合なるをひたまねにまね真似とげんには天質の美にはぢざるべし我この事をつねに人にかたりて下戸の酒のまざるは手がらなし上戸の酒やめてんこそ手柄なれといふ所なり我ひとり然おもふにもあらざるにや先年中津にて藤田敬所先生とかたりし事あり敬所は東涯先生に従遊せし人なりある時東涯の許へ熊本の上何某きたりてかたりけるに話赤穂義士に及べりその時其士いひけるは死はかたき物と覚へ侍る右の輩死はとく決せる面々なりされども自裁の命下るを聞て容貌自若として動作平生にことならざりしは良雄なりといひければ東涯此ときにあたりて色はとふべき事にあらずといはれしにぞ右之士面に微紅を発せし由かたられし事あり誠にとくと思ひ見れば死をかたんずる人の死につくこそ猶けなげなる事ならめ是につけて善をせん様を人にききて今に切に覚へたること有そのいひける様は人悪と見てせん様なし悪と見てやまざるは情慾の為にひかるればな

り其情慾を制せん様は久しき事にあらず只しばし、しのぶべし誰にもせよ、たとひいかほ
 どの情慾うごくともしばし忍ぶる事のならざる様やはあるしばし、しのばばまたしばしし
 ばしにしばしし侍らば其ことは過ぎるべしさるほどに何とも力をつけてなすことは只しば
 しのことぞかしいかでつとめざるべきと語りきまことに心にかたんずる事もしばしにしば
 しし侍らば程なく其時もうつりて又四方八方のおかしき事におしうつるべし又死のかたき
 も只しばしの事なるべし是は只親につかふるの事のみにはあらずなべて覚悟すべき事にて
 君臣内外ものまじはりなす事にも順境あり逆境あり順境ならば何事なし逆境にあひなば
 此言おもふべし時宜におゐて忍びてやむべからざる事もあるべけれどもそれも忍びて後の
 忍びざるなるべしさてかくかたりし人は宝曆の頃高野より来りし遍阿といへる僧なりわれ
 この僧には方外の交りわきて深かりき指を屈して数ふれば此人世を辞して己に二十餘年此
 事をしらすにつけても賤のをだまきくり返しむかしを今になす心地して思ひ出る其事ども
 をとめて子等にも見よと遺し侍るこの僧の筑紫にさまよひしはもと日向の古月禪師をした
 ひてなり渡海の頃は古月既に世をされりよつて後席の下に臘に座しそののち身を雲水にま
 かせここにも遊べり三年ばかりとどまりて心のくまなくうちかたらひしが此人威儀甚だ端
 嚴三年の間終に跛倚のかたちを見ずいつもあさしののめにはおき跌座して日の出るをまつ

衲衣身をはなつことなし予五十年来接する所かかる端嚴の人を見ず物よく書詩歌かきもたしな
 めり仏の道説けるさまも世の常とは同じからずある時人々集りて道のさまさま物がたりけ
 るにかたはらより何やらんいひ出て是は仏の言にてもよからぬなどいひければいやとよ然
 にあらずほとけはあしき事いはず仏の言にしてあしくはいかで仏とはいふべきたとひその
 言経文に書たりとてもけふ能仁ここに出現してとくともあしからんは仏の言にあらず狂
 夫癡人にもせよいひ出でよからんは皆仏の言なりといへり又其人の難じけるは夫男女の道
 は天地自然の道理にして陰陽の道なり、しかるを其間をわかつて道をたてたるはあやしと
 いひしに僧こたへて僧は世を捨て道を修するものにしてこれ声聞のさまなり家にあるも同
 じ仏のかたちなり何かへだてのあるべきされども道を修するため一旦形を声聞に託せばい
 かで世の塵にはそむべきとかたりける予が隣に老婢あり主人門おとろへ産つき有し家も人
 にうり世をわたるいとなみもなかりしかば十六より身をうり租徭をつくのひ家の老父母八
 十有餘主人夫婦己が母兄に衣をぬぎ食を給しなき跡の弔等もつとめたり其頃は亭主の婦は
 やみ老母はつかれて床に有しが身をうりたる主人にしばしのいとまもらひ老たる主人の冬
 の衣せんとすれどもせんかたなきとて苦にやみけるを此僧来りあひてきき折から己も衣せ
 んとて木綿買て携たりしが其物語聞てさても目出たき志かなとて是を投じてさりぬ物にふ

れて義にいさむ事かくのごとし宝曆四年閏二月二十九年三十九速見郡小浦風月庵にして寂
を示す遺偈有

如是如是更如是

生如是兮死如是

即今天地踏翻来

松風羅月只如是

左手五鈷を持し右手金剛峯をさし溘然として逝けり道の為に千里の波濤を冒せしもあだに
はならざりしと見ゆ此僧たへて俗姓をかたらず後にきけば芸州上田生水につかへし安宅左
仲といひしが遁世せしにてありしとぞ此前の秋いとあかきに月前露

風ふけばちるともしらでかすがの

草葉の露にやどる月影

といふ歌ありしが歌の識とこそ思ひなされ侍れ

古狸

先年伊勢より安楽房といへる僧来りしがそのかたりけるやう今は久しき事なれば処はさだ
かに覚へずある侍其つまこと心ありてうらのつい地越てかよへるものありつつむとすれど

人目よきがたくいつしか瀬瀬の網代木あらはれて世の人も沙汰するばかりになりぬしかるに此あるじなる夜弓矢たばさみうらのかたに出けるがしばしありて、やれもの共火とぼし来れあやしのもの射とめつといふに下部どもさはぎ提灯提げ行て見れば大なるふる狸ひとつ矢負ひ死したりそこにてあるじいひけるは我ちかきころうらの築地をこえ来るものありあやしと思ひうかがひけるが狸にて有けるとて取すてさせたりまた此ことを世につたへて彼家には狸よなよな通ひけるなど噂しけるそれより三十日ほどありて其妻を何となく親ざとにかへしやりぬ其事は世にも嘸しりけんなれども人其智を感じけるとぞ妻を出しては嫁すべからしむといふ古語など思ひ合せ感じけるまことに妻もてる人はききてもあらまほしき物がたりなりあるじ家道正しくは徳に化し女の心もおさおさしかるべきなれども男女の中は人の大慾の存する所なれば或は多年空房を守り又はさなきもあまのしほやのたく烟風になびきそめなんも鄭衛の声のみ耳にききふれ方正の教きかざらん人はあやまつまじきことにあらず古へのひじりの道は不孝の罪を第一とし不貞をば淫なれば去るとありされども今の風俗は見苦しきをば斬てすつるも夫の道とすれば不孝よりも重しきりたればとて家の教の正しからざりしあやまちは補ふべからずむかしの文にはこれを悪を昭らかにすとて不祥の事にせりあやまち補ふべくんば補ふべし補ひがたき日は風俗なれば下策ながらも腰ぬ

けといはれんにはまさるべし古賢の教には正しき道はあれども過の補ひ様は多く見えざもあるべき事なりされ共つくづく世の中を見るに愚にとりまどへるよりよきかたに手とるべき道しらず雪上に霜を置とやらん見ぐるしさに数かさぬることぞ多かるたとへばわかき頃人目しのびの戯れ或は博奕遊俠事にのぞみて短慮のふるまひ進退事はまり或は郷里をさり或は自刃の上に死し家名をけがし屍を路頭にさらし一族までの面ぶせになり生死をへだてても事とはぬ様になるは甚多き事なりわかき頃親のいましめ師の教へきかざるはにくむべきなれどもそのおろかなるよりまよへるは又あはれむべき事なり是をにくみてこれをたてばかの人の子をそこなふ是を衣服にたとふれば破れ綻び垢きたりとてそれをばすてあたらしくせんはいさぎよけれども破れそこなひたらんには補ひつづり垢づけるをば洗ひぬれなばほし幾度も着るべき様にせんこそ家をたもつの良法ならめ詩にも兄弟牆にせめげども外其あなどりをふせぐといへるはたとひ家にてはとかくいひ恨むること有とても他人に對して弟は兄のさかつつみ兄は弟のよしなし事いかであらはすべき誠に親の悪顯るるは子のはぢにして夫の悪外にもるるは妻の恥ならずや妻子眷属朋類にいたりても世はなべてしかるべきことなればにや舜も悪をかくして善をあぐと有楚王群臣と宴ありしにとぼし火きえしひまひとりの臣酒をめぐらせし宮女の袖を引しを宮女その臣の冠の纓引きりて燭いた

らば見給へと申せしを人に酒をすすめ酔ふを罪せん由なしとて群臣に命じ一同に冠の纓を
たたしめし事世の美談にあらずやされば若き人もつとめて行ひを正すべき事なれどももし
進退に難渋なることあらば智ありておとなしきちかき人に身のあやまち事の難渋をうちあ
かして身の進退をはかるべし加ならず慮りみじかく命捨つ家出しつせんことつつしむべし
己も今迄の非をさとり改らるる事は改むべしもはや改がたき事あらばはづかしくとも親兄
弟にも遠慮せんはかへつて罪ふかかかるべし其故は其人にげたりとて死したりとて其恥きゆ
べしや是も廉恥の心ながら廉恥の用ひ場あしきなりここにて其恥すすがんとならば一旦の
面伏をしのび従前の非をあらため再び身を新にしふるき恥辱をすすぐべし聖人にもあや
まちはあるものなり過つて改るをよしとす其あやまちにせまり人にもかたりがたきなど遠
慮して君父に不忠不孝をなす人あり又これをきく親兄弟のたぐひ己はあやまちせぬ人の様
にかめしく力みかへり水に溺るる人を見捨にせんは甚だ不仁の至りなりとかくあやまて
る身にはみづからはいかんとも処しがたきものなりわきより人目つくらふ道をひらきよく
いさめなぐさめなだめ過をあらたむること己が心より生ぜしむべし必いかりののしり犬を
追て牆にせまるべからずさりとて衣の綻び破れ数かさなり衣となすべき道なくばいさぎよ
からんこともよかるべし遠慮なくしてはらくろにこなたより時のこゑをあげ塗に塗をつけ

血を血にてあらはば似たるうづけものなるべし時宜により手いたく取行はんは千思万慮の上なるべしこれまた格別の事なり唯平生家の心づかひといふものは火とりはなさぬ様にと心得べし火とりはなしたる上は類焼出来ぬが肝心なるべしかねていへるごとく廉恥の心なきは禽獸にひとしきなり此故に父子夫婦は至つて心やすきものなれども相たがひにつつしみて身をきよく潔く互に恥らふべし隔心にあれといふにはあらず心得ちがひたらんにはよくいさめあふべしそれを夫は妻の髪引ずり女は夫に人のあるを幸ひにあらぬ善悪などいひちらすいかにはしたなき態なるぞやあしく心得たる女は大かた諫にしたがはぬもの也従はざるは唯暇遣すまでの事なるべし然る故にかへすがへすも廉恥の心を養はざればたかきもいやしきも用たらず男ぶりよくうつくしき衣着馬駕籠にのりても恥しらざれば姿人するものなり

今の世は学好まざる人は士太夫といへども文ひもとくにいたらずまして下さまの男女聖人彝倫の教生涯にもきかずそれさへあるに浄瑠璃歌舞戲様のものはやり唯人の情慾にかなひその心をとらかし激する様を見て義理ぞ恩愛ぞと覚へ淫奔私昵の情内に動き男女君父の家をさそひ出あるひは自刃の上に死を共にし是をいざなひ道引人を恩愛のふかきとし是にあづかる人いつしか咨嗟感羨のあまりその陷奔に落いるむかしは三弦小うた

様のものは瞽女座頭のいやしき業にして時のうさばらしには呼てかなでさせうたはせて
きく事はあれど手に觸るるものにはあらざりしが今はむすめそだつれば針糸のいとなみ
より先是等の事を先としてむかし聖の御世には天子の後といへどもこかひして御衣を織
給ひしをこれをば人の前にては下女様の業のやうに恥らひあやしき心を誘ふほどに先入
るもの主となり後には父母の心をいたむる事ともなりゆくは勢ひのしかる所なりさるほ
どに髪かたち染模様にいたるまでもおとなしきを学ばんとはするものなくいやしき遊女
野郎の真似する程に男子も社禰立居のふるまひ俳優のとりなりに似まほしき事をもとむ
る世となり風俗日日におとろへゆくゆく其弊恐るべしその上其浄瑠璃狂言の恩愛義理だ
てを誠の道とこころえ父母の命媒灼の言もまた袖のふり合せ手を取りそめし信をたて
男をたつるの女をたつるのと意地をはり君父の恩恵にそむき一生を野倒者となすいと
げかしさるほどに夫婦の道のあらましをここにしるして文よまぬ人に告侍るさて君子の
道は端を夫婦になすとて人倫のおもき礼なり去程に親媒の見はからひ有て六礼とて一に
其人を見さだめて言入るを納采といひ二に女の名をとひ吉凶をうらなふを問名といひ三
にうらかたよき事を告るを納吉といひ四に縁むすびたるしを納徴といふ今いふ結納
なり五に娘とる月日を約するを請期といひ六に賀みづからむかゆるを親迎といふ暮かた

の物なるほどに昏礼といふ今とても問名納吉を除きては其事行はるるなり然ふして婦に
 成婦といふ事あり成婦とは其家の婦人たる事を成就したる也此六礼をそなへて迎ふるを
 妻とす此礼なくて来るを走るといふ走るものは妾とす親媒のなくて合ふを野合といふ此
 方にては腐合ふといふ野合の人いかでか成婦たる事を得ん曾子孔子に昏礼已に幣を納れ
 吉日を定めし女の父母不幸あらばいかにと問にそれは婿のかたより人を遣して弔はしむ
 賀のかたの不幸もこれに同じ婿の家の不幸に其親方なる人より女のかたにいひ遣はすは
 某し不幸にして父母の喪にあへば不_レ得_三嗣_一為_三兄弟_一使して先の命を致すとなり不_レ得_三嗣_一
 為_三兄弟_一とは夫婦は兄弟の義あればなりこなたにて妹兄といふがごとし女子の家命をう
 けて後喪終るを待再度縁を結ぶも結ばずとも心次第也女の家の不幸も同じと孔子こたへ
 給へり又孔子の言に親迎の後三月而廟見称_三来婦_一也扱_レ日而祭_レ於_レ禰成_レ婦是己にむかへ
 て三月なれば一季を経其後新婦祠堂に相見祭祀終りて後始て婦人となりとぐる也曾子又
 女未廟見せずして死なばいかにと有しに孔子の答に不_レ遷_レ於_レ祖不_レ祔_三於_レ皇姑_一是祠堂に
 配食せざる也さて不_レ杖不_レ菲不_レ次服ばかりにて喪の制をそなへざるなり婦葬_三於_レ女子之
 党_一猶夫婦をなしとげざるほどに女家の党の人なりとぞ又女をめとらんと欲して吉日を定
 めて其女死するには婿齊_{しさい}哀_{しさい}し弔し終つて服をのぞく婿の死するも同じとなり是を以て我

平生婦人の道礼を以て合し義を以て離るといふかかる聖人の礼ある事をしらず淨瑠璃狂言を手本とし女は男にまみへては離れぬを貞と思ひ男は女をすてざるを義と思ひ弥男女の道を失するなりかく聖人の礼あれば親媒のはからひにて一旦縁談ありたりとも夫とすべきもの死したりとて去就道あり女子の節に瑕なしここをしらで意地をはり父兄に物おもはするは道ならぬ事とおもはるまして誤りて野合の事あらん輩は早く前非をくひ別れ離るるをよしとすしかるを我情慾のむすびを貞の義のといひのしり其臭をかさぬるこそあはれなれ論語にも信義に近ければ言復べしと見へたり義なきの信はふむべからずあらたむる社見事なれたとへば辻ぎりせんと人に約したるが如し是道ならざる事をしらば早くやむにはしかじ

府内桃路新作

此事年序詳ならず為人抄に出たれば大かたは慶長あたりの事なるべし本国府内の事なり園田作右衛門桃路齋宮いづきといへる両士口論の事あり作右衛門終に齋宮を討て立退き加賀の国に跡をひそめ山下伊織と姓名を変じ兵法の師をして在けり齋宮にひとりの小兒あり新作といへりおさなかりしかば未だちちの過し故をもしらず手習師のかたにて伴ふ子供と相摸をとりて勝にけりまけたる子はらをたておのれ臆病ものとのしりけり新作かちて臆病なる

ものやあるといひければ我親を人にうたせ敵の有無をも得しらぬは臆病者にあらずやといひけるをききとがめて事のよしども始て聞いたくかなしみ無念に思ひ母にいとまをこひ跡をしたひ終に加賀にいたり春の頃伊織が草履取となりしが折節伊織時行の病にそみていたうくるしみける新作力をつくし看病しけるが六月の末やうやくこころよくなりぬここにおゐて新作すすんで申けるは我は御辺が手にかけて桃田齋宮が子なり復讐の為はるばる是までしたひ来りし処折から御辺がやめるにあひ病者と勝負を決せん事男子の志にあらずと力をつくして介抱せり今は病もいえぬれば正しく親の敵なりうらみの太刀こころみよと告ければ伊織よくこそと日を約し野外に出て伊織が寸槍新作が太刀と三たびあふて三度わかれ勝負の色も見へざりけり時に伊織槍をすてはだをぬぎ其方千里の路をしたひ来れるこころざしをおもひやりて殺すに忍びず我首を送るなり早く来りて本望とげよと頭を出して坐したりけり新作刀をとりてむかひしがうちもやらすや久しくありて終に刀を納め相伴ひて帰りしとぞ思ふに伊織は兵術老練の士三度あひ三度わかるるの間新作をよき程にあひしらひしなるべし其年少の身としてよく其氣をふるひ千里の雲山波濤をわたり已にむかひ我病るを見て人を厄にくるしめず其勇力の復するを待ち直に己れが槍先にあたるの志氣を感じその孝をなさんとせしなるべし新作は三度あひ三度わかるる間かの槍先するどきのうち已

にあらそはざる所あるをしりしなるべし争鬪のよる所しるべからず伊織義を以て命を新作にさづく新作伊織が義を自刃交るの間にしる截断の一刀まことにほどこすべからず然りといへども義不戴天にあれば其情感ずべしといへ其又したしみ交るべきにあらずさきには讐をうたざるを難事とし今は讐をうつを以て難事とす我新作がその殺さざるをあやしまずして相携へて帰るをあやしむ思ふに此時戦争の時節なればあるひは君の為に一死力の士を得て国に忠をなさんと欲するにやよむ人願くは左すべからず右すべからず一線路上において一転身の語を下せ

筑後赤星新六郎・篠才藏

むかしの人孝子の行を挙て草木のまさに長ずるを折らず昆虫の蟄を啓くをふまずといへり故ありやむ事を得ずして殺すといふこともあるなれども無益の殺生はいにしへの良将も首としていましめ置れたりげに我口腹器玩の為に物の命をたつことは是を業とする人ならばやみて有たき事なりわれ幼き時川に遊び小魚三ツ四ツとらへ石鉢に入て遊びたりしを先君子見給ひ籠鳥の雲をしたふといふ事をしらずや鳥は林に己がまにまに飛かけり魚は流に我を忘れすむなるをこれを器の中に入れ彼がくるしみをもて己がたのしみとする事やあるいそぎはなてとて追やられし事あり先君子吾輩子ともなふる様の事あれば人をくるしめて

たのしまずともなともろともたのしまざるといましめられ又ある時人来りてさる処に火事有車馬旁牛上下混雑せし事も語りけるを我見ば一興ならんといひしを先君子眉をひそめくるしき処をば火宅とこそいへ人のさばかりなげきかなしむを一興とは何の心ぞと叱り給ひしも遺音耳にのこりて六十字の年已にすぎぬ人によりては殺生せぬ子は甲斐なしとて心おとりする様に思ふもあれど甲斐なくてしかるもあるべし誠の勇者も又しかるべしある人虫ふまぬとて一番槍なるまじきかといひしをきけり仁義の勇はしかるこそあるらん物にくるしみなやむを見て哀とおもふ心なくば本心をうしなふに近かりなん人さかんなりとて天道をおそれざらんや足利の末皇綱紐を解き柳宮の勢かろく天正の頃にいたりては諸国瓜のごとく分れ鬭争やむひまもなかりけり時龍造寺隆信は肥前佐賀に在蒲池鎮並は筑後柳川にあり此時赤星統家は蒲池が妻の兄なれども勢やむ事を得ずして嫡子新六郎とて十四歳になりけるを龍造寺に質に遣し置けり龍造寺赤星の心をあやしむ事ありて招きけれども得いたらずよりて成吉木下などいへる家臣を遣して事の由糺さしめけり折から赤星内にあらず二人の吏これをいかり新六郎がいもとの八歳になるがありしをとらへて帰りける龍造寺いよいよ野心なりと憤りて二人の子ども筑肥の界なる竹井原に引出しはつつけにぞかけにける武士ども今ぞ最後なるぞ念仏申せ西にむけんといひければ新六郎

我面西になむけそ赤星の

親にうしろをむけしとおもへば

とよみて刑に就きにける年纔に古子路纒を結びしにもおさおさはぢず死に臨みてもいさぎよく家の風をかほらせしはたぐひ稀なる事なるべし造次顛沛ここにおゐてするみさほ士たるものの師表となすべしさて社統家も志を決し島津に身を託し龍造寺も終に島津に身をうしなひぬ ある説に大友新六郎をころすとありうたがふべし 不仁のいたす処なるべしさて此文は此ほとりちかく見聞ける孝子の事ども其名の後に伝へざらんも本意なし我人を道びく徳もなければ女文字に書つらねて家の子等にもこのしなからんあとにも我と見て庭の紫荊の日にそへて枝葉しげからん事をおもふ赤星の事ども伊蒿子の孝子伝に載さるも遺憾なりいとけなき身の難にのぞみ確然として終をとりしが勇勇敷ければ此文の結びとはなしぬ夫身は父母の遺体なればふかき淵にのぞむごとく薄き氷をふむごとく全ふして父母にかへすを孝の終とするなりこの故に其酒に長じ色に耽り利慾にくらみ身をうしなふ共に不孝の数なりさる程に戦戦競競として爪髪にいたるまでも大事にしてかへすを道の常とせりされども世の中は常あれば変あり事変ずれば道も又常ならず故に曾子一度は身体髪膚あへてそこなひ傷らずといひ一度は戦陣勇なきは孝にあらざとありされば今の人のむかしの勇士の事をおもふにはただにはやり過

たるあらもの様に思ひなされるれどもよくその事を考ふればかならずしも然にあらざればむかし箕田綱、坂田公時に人の剛ならん様をとひければ臆病になれといひしも此さかひにして臆病とはかひ打ふつてにぐる事にはあらず君父まさかの用に立なん身なれば常に大事にたもつべきなり今ふたつなき身を酒色にそこなひ一朝のいかりに朝ゆふへをかへりみず父母一生のいたはり君上数代のいつくしみにも用立ざる事不忠不孝にあらずして何ぞやされば福島正則の家臣可兒才藏は時に名だかき勇士にして関ヶ原の戦にも一番首をとり猶あまたの首どもとりて神君より篠の苗字を賜りし程の者なり我これを芸人にきけり正則広島にありし時才藏湯屋にゆき湯あみける事ありしが同志のわかもの不図喧嘩し出しけるに才藏は刀おつ取其処をばづしけり他日ある人御辺程の人のかかる処をば何とてかくはさられしといひければ才藏我に私の命なしと答へけるとぞ古勇者の用心察すべし父母は我をたのみ妻子は我を天とし君は国家社稷のたすけに扶持し給ふ身なれば我身とて我身にあらざたとへば竜泉大阿を佩るがごとしまさかの一割は惜む処にあらざといへ共つねづね扨拭してかりにも鏽をいたさしむべからずこれをおもひて我身の重きをしらば人の身も又重きをしるべしかく身はおもきものゆへ故なうして人を殺すべからず道にそむひて身をころすべからず故に死するに死すべき所あり生るにいくべき所ありさる程に篠が用心を曾子の教に

かんがへて身の進退をゑらむべし

かくしるし侍りておもひつづくるに竹馬のむかしも足はやみいつしか双鬢雪をたれ六十字にあまる春をむかへぬ恃み恃みしかぞいうも只風樹葉落遺容のみ眼中にありて幾年のむかしとはなりぬさありて豚犬の輩やうやく粟と棗とをばわかつてりしかればひとへに子の道のみいひて子等にしめすも己が田をすてて人の田を耨るを病に近からんよつて思ふに我猶慶を具へし日父虎角府君我にいひ給ひし事あり其言に我齡已に古稀に及べりつらつら世の人をみるに年老れば心耄するものなり耄しては自耄したりとおもふべきにつやつや物もわかれぬ程いとどみづからには心正しと思ふなり我老て猶自らむかしにかはらず思ふも耄してかくや思ふらん汝が輩我あしからんとおもふをば必ず告よ我かならず従はんと給ひきかかる有がたき庭の訓をききつつ子等にわけなき心づかひさせてんは空おそろしき事ぞかしおのが田をすてて人の田を草ぎるを病むとはおのが田に草の茂れるをばおきて何がしの田こそ草生ひたれかくしてはいかで田なつものの実のるべきゆくゆかかれが身の上いかがするらんなど苦に病むがごとし人の田のあれなんもさる事なれどもそれはその人のみづからせむべき事にして先おのが田のみのらざらんこそなげくべき事なれ只世の中の情子は子の道を講せずして親の子に処する道のみをいひ親は親の道を忘れ子のよからぬのみ説只人の

田の草をのみやみておのが田のあるをかへりみずもし各をのが田の草糲らんとらば子は子の道をつとめ親は親の道を修め度事なり後來新婦今為し婆にて子なりとおもひしもはや親になりぬ予愚にして家におしゆる程の事ならずともてあましたる親かなと世におもはれざる程にはせめてあれかしと心に籠めて思ひ侍る世へだたり時うつれば古のいみじきことば行ひもむなしくなりやすきが本意なきほどに府君の教給ひし事数多きが中つまびらかに記せし事をとどめて児孫に送るものなり府君は常にあはれみの心をおもとし給へり寒きものを見ては衣を解き飢たるものを見ては食を推し輔頰舌のことあればみづから往てその難を和し給ひき一年秋大にみのらず春に及び飢るものおほきによりいろいろ心をつくし給ひける中に半里もへだてたるかたのかねてしれるにもあらねど飢つかれて往すへ溝壑にみたれんも覚束なしとかたるもの有ければそはきかざりし事よとて米味噌様の物饋り猶も心のやすからずとて老の杖引ずり二十町ばかり見もしらぬ人の門問給ひしに足門に入らんとする時家慟哭の声を発せしかば悲歎してかへり給ひき我におしへ給ひしは人は只慈悲を主とすべし隣に飢る人あらば食をうまく食ふべからず貧家にうらみあるものなり我ものを我にして着我にしてくらふに何うらむる様やあるといはんれど是は理屈といふものなりたとへば汝の身を飢てくらふの食なくごごえてきるの衣なからしめ老たるや幼きが呻吟する

に風かよひ雨もる蓬生の小屋にあかしくらしなばかたへの人の衣うるはしく滋味にあき遊
侶あつまり歌うたひ酒などたうべんに人はかくもあるものをといかでうらやむ心生ぜざら
んそのうらやむ心即うらみなりかならず人にうらみなむすびそとなを耳底にとまりて今の
様に思ひなされぬかかるとも永く家にいひ伝へて世世のまもりとなすべきなり

天明三年癸卯睦月 三浦すゝ武しるす

- 「愉婉録」（『梅園全集下巻』、名著刊行会、二〇一〇年十月五日、二刷）所収。
- 漢字は一部を除いて新字にあらためた
- 本文中空白の部分はその字数分だけ□で埋めた。
- 振り仮名は底本のままに付した。
- PDF化には`LATEX 2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館 「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/sciencel1b.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>